藤崎遺跡 6

—藤崎遺跡第15・16・17・18次調査地点—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第259集

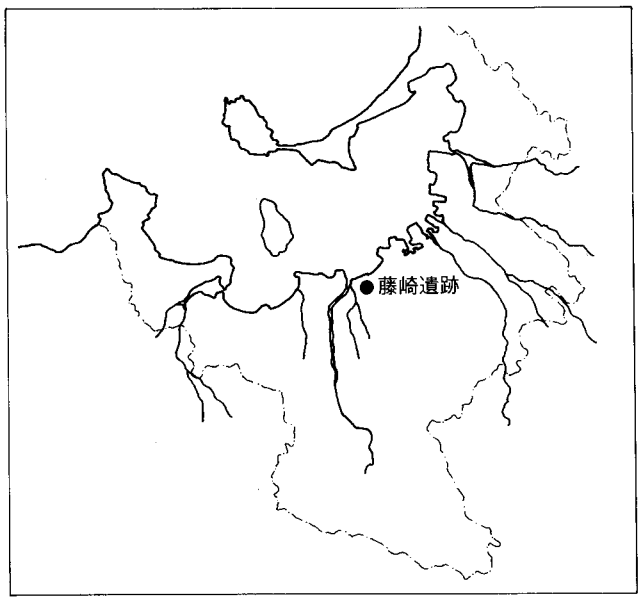
1991

福岡市教育委員会

藤崎遺跡 6

—藤崎遺跡第15・16・17・18次調査地点—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第259集



1991

福岡市教育委員会

序

福岡市の西部の藤崎・西新地区は、弥生時代から人々の生活が営まれた福岡市有数の大遺跡群です。古くは、1912年の三角縁二神龍虎鏡の発見以来、貴重な遺構・遺物が多数発掘され、貴重な成果が報告されています。その多くは、福岡市高速鉄道、バスターミナル建設を始めとする開発工事に先立つものです。近年は都市化に伴い開発事業も増加し、発掘調査も増加の一途をたどっています。

今回報告する第15・16・17・18次調査は、いずれも1989年度に調査が行われたものです。各調査地点では、古墳時代から中世に至る各種の遺構・遺物が検出されました。従来調査の比較的少なかった遺跡南端部の様子をうかがい知る手がかりがえられ、早良平野の歴史を究明するうえで貴重な資料となるもと考えます。

本書が市民の皆さんの文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究においても活用していただければ幸いです。

調査に際しましては、地権者の皆様を始め、関係各位に多大のご協力をいただきました。

心から感謝の意を表します。

平成３年１月10日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　　言

1．　本書は、早良区藤崎に所在する藤崎遺跡地内における民間開発に伴って、事前調査を行った第15、16、17、18次調査地点の調査報告書である。

2．　本書使用の遺構実測図作成者は、以下の通りである。

第15次　加藤良彦　黒田和生　英豪之　溝口武司

第16次　池田祐司　長家伸　　第17次　横山邦継

第18次　宮井善朗　長家伸　井上靖崇　今村真也

3．　本書使用の遺物実測図作成者は、以下の通りである。

第15次　加藤良彦　宮井善朗　第16次　長家伸　第17次　横山邦継　第18次　宮井善朗

4．　本書使用の遺構、遺物写真撮影者は、以下の通りである。

第15次　加藤良彦　平川敬治　第16次　長家伸　第17次　横山邦継　第18次　宮井善朗

5．　本書使用の図面の製図は、以下の通りである。

第15次　加藤良彦　宮井善朗　第16・18次　宮井善朗　第17次　横山邦継

6．　本書の執筆は、立地と歴史的環境の項を宮井が行い、各次調査の記録は、各担当者が行った。

7．　本書で用いた方位は、磁北である。

8．　本書の編集は、各担当者の協議を経て宮井が行った。

9．　本報告書に収録した遺物及び記録類は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管されるので、活用されたい。

本文目次

藤崎遺跡の立地と歴史的環境……1
第15次調査……5
1. 調査に至る経過……8
2. 調査体制……8
3. 調査の記録……9
4. 小結……19
第16次調査……21
1. 調査に至る経過……22
2. 調査体制……22
3. 調査の記録……22
4. 小結……26
第17次調査……29
1. 調査に至る経過……29
2. 調査体制……30
3. 調査の記録……31
4. 小結……36
第18次調査……37
1. 調査に至る経過……38
2. 調査体制……38
3. 調査の記録……39
4. 小結……49

挿図目次

Fig. 1 藤崎遺跡周辺遺跡分布図(1:25000) 2
Fig. 2 藤崎遺跡位置図（1：5000） …… 3
Fig. 3 第15次調査区遺構配置図
土層断面図（1：125） …… 6
Fig. 4 調査区遠景（東から） …… 7
Fig. 5 調査区全景（北から） …… 7
Fig. 6 弥生土器実測図（1：3） …… 9
Fig. 7 SQ28主体部（南から） …… 9
Fig. 8 SQ28実測図（1：40） …… 9
Fig. 9 SQ28主体部完掘状況（南から） …10

Fig. 10　SQ28掘方完掘状況（南から）……10
Fig. 11　SC24実測図（1:60）……11
Fig. 12　SC24完掘状況（南から）……12
Fig. 13　SC24竈（西から）……12
Fig. 14　竈横断面（西から）……12
Fig. 15　SB29実測図（1:100）……13
Fig. 16　SB29（北から）……13
Fig. 17　SK05実測図（1:60）……13
Fig. 18　SK15実測図（1:60）……13
Fig. 19　SK15（東から）……13
Fig. 20　SK23実測図（1:60）……14
Fig. 21　SK23（東から）……14
Fig. 22　土師器03……14
Fig. 23　土師器03使用痕……14
Fig. 24　古墳時代遺物実測図（1:3）……15
Fig. 25　SK08実測図（1:40）……17
Fig. 26　SD26土層断面図（1:40）……17
Fig. 27　SD26土層断面（東から）……17
Fig. 28　SD26全景（西から）……17
Fig. 29　中世遺物実測図（1:3）……18
Fig. 30　漁撈具実測図（1:3）……18
Fig. 31　タコ手釣漁具……19
Fig. 32　土製猿実測図（1:2）……19
Fig. 33　第16次調査区遺構配置図（1:80）…23
Fig. 34　調査区西壁土層断面図（1:80）……23
Fig. 35　SD01, 02土層断面図（1:80）……23
Fig. 36　SX01実測図（1:80）……24
Fig. 37　SB01実測図（1:80）……24
Fig. 38　各遺構出土遺物（1:3）……25
Fig. 39　包含層出土遺物（1:3）……27
Fig. 40　Ⅰ面全景（南から）……28
Fig. 41　Ⅱ面全景（南から）……28
Fig. 42　調査区西壁土層断面……28
Fig. 43　第17次調査地点図（1:200）……30
Fig. 44　遺構配置図（1:100）……31
Fig. 45　SK01実測図（1:40）……32
Fig. 46　土壙出土遺物実測図（1:3）……33
Fig. 47　SK02, SK03, SG01実測図（1:40）……34
Fig. 48　SB01実測図（1:60）……35
Fig. 49　炉跡及び柱穴出土遺物実測図
（1：3他）……35
Fig. 50　遺構検出面採集遺物実測図
（1：3他）……36
Fig. 51　第18次調査区土層断面図（1:60）…39
Fig. 52　第18次調査区遺構配置図（1:100）…40
Fig. 53　SD101, SA103, SK105実測図（1:40）…42
Fig. 54　SD101, SA103, SK105（北から）……42
Fig. 55　SK106, SK104, SC102実測図（1:40）…43
Fig. 56　SC102（北から）……44
Fig. 57　Ⅰ面全景（東から）……44
Fig. 58　Ⅱ面北半部（東から）……45
Fig. 59　SB202実測図（1:40）……46
Fig. 60　SB202（南から）……46
Fig. 61　出土遺物実測図（1:3）……47
Fig. 62　出土遺物……48
Fig. 63　調査区西壁土層……50
Fig. 64　調査区南壁土層……50

付図　藤崎遺跡調査区配置図（1:500）

藤崎遺跡の立地と歴史的環境

藤崎遺跡は、福岡市の西部、早良平野北端海岸部に位置する。早良平野北端海岸部には、古砂丘が発達し、その後背地には皿山、麁原山等の独立丘陵がそびえる。さらにその南は、低湿地になって、小田部の台地につながる。福岡地域の玄界灘沿岸部に通有の地形である。

藤崎遺跡の発見は古く、福岡市による第１次調査からでも１３年を数える。顕著に見られるのは、弥生時代から古墳時代前期に属する遺構、遺物である。該期の遺構は、現在国道２０２号線が走る古砂丘頂部を中心に分布する。

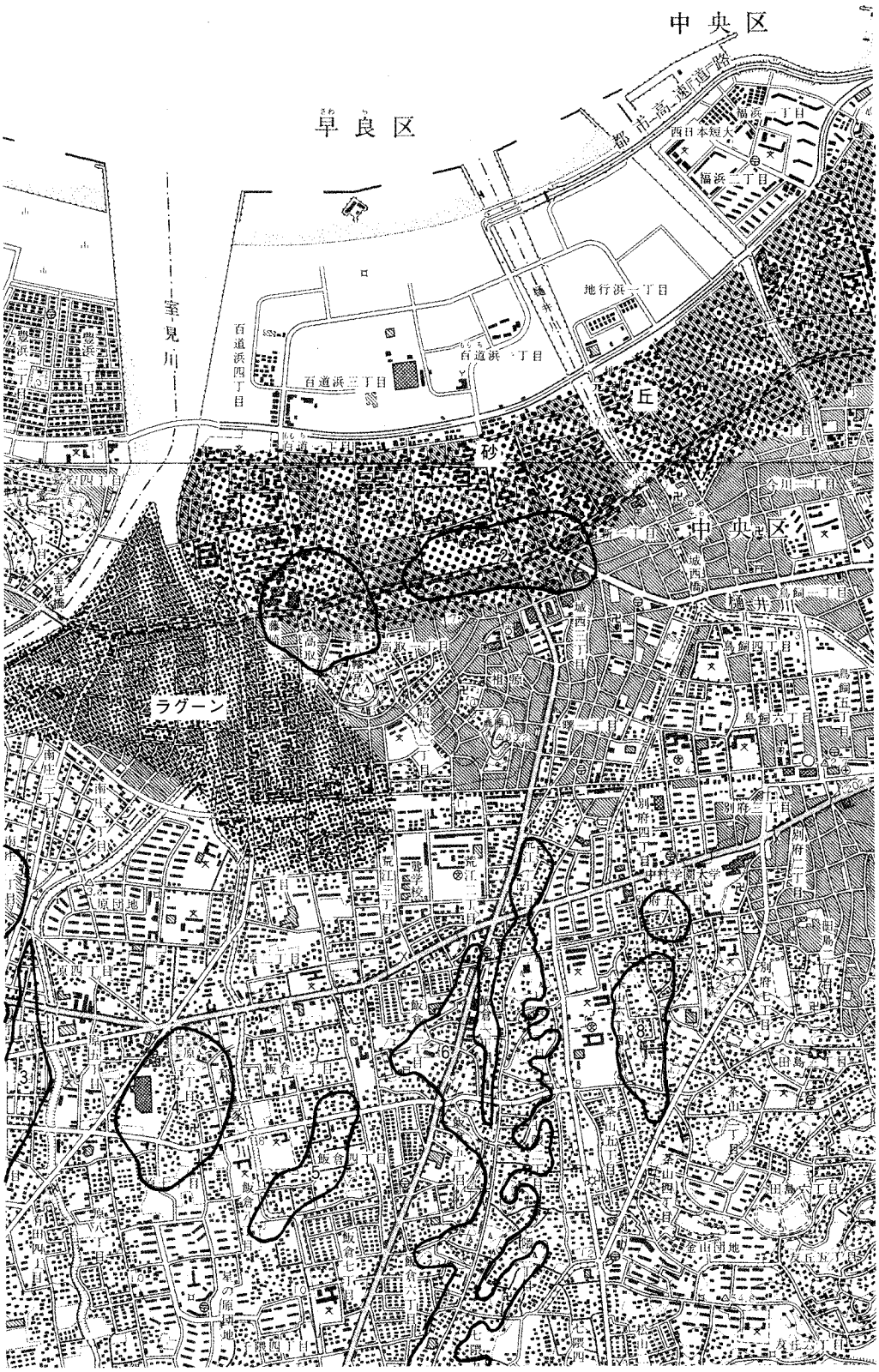
ここでは、今回調査を含め、藤崎遺跡内で近年調査例がふえながら、比較的取り上げられることの少なかった、古墳時代後期から中世にかけての遺構をまとめてのべてみたい。

古墳時代後期の遺構としては、竪穴式住居跡、土壙などがある。１次調査では、該期の住居跡が、１基以上（６号住居跡）検出されている。３次調査では、１～４号住居跡が、古墳時代後期のものとされ、１、２号住居跡からは、移動式のカマドが出土している。また、９次調査では、２号住居跡が該期の物で、作り付けのカマドが検出された。該期の遺構の分布は散漫で、集落の中心部を特定するのは難しいようである。しいて特徴を探せば、遺跡の西半部に偏る傾向があると言えようか。

古代～中世の遺構としては、土器溜り、溝、土壙（土壙墓を含む）などが検出されている。３次調査の７号方形周溝墓の南辺周溝上からは、７～８世紀代の土器を多量にもった土器溜りが検出されている。約２ｍ四方の範囲から、石塊とともに出土したものてある。器種としては、須恵器坏が多いが、須恵器長頸壺、平瓶、土師器甕、高坏などもある。また１０号土壙は、中世土壙墓で、竜泉窯系青磁碗、同安窯系青磁皿、短刀、砥石の副葬があった。

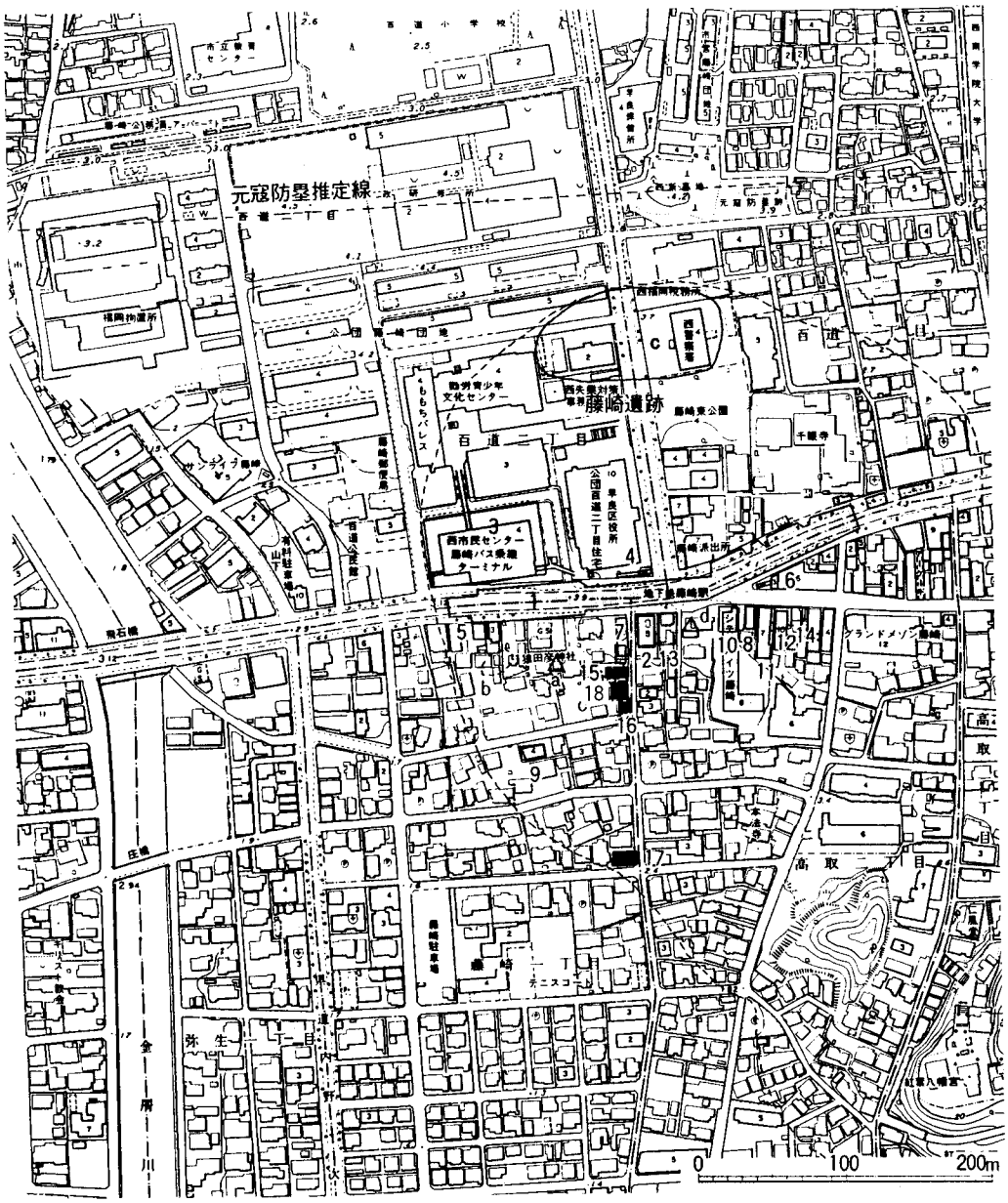
遺跡中央部にある独立丘（栄山）の北方の、８、１０、１１、１２、１４次調査地点では、１３世紀後半を前後する時期の中世溝が検出されている。ほぼ東西に直線的にのびるもの（８次調査１号溝）と、やや蛇行しながら延び、１２次調査地点から、北側へ曲がるとされているもの（８次調査２号溝）がある。栄山をめぐる可能性や、元寇防塁とほぼ平行することから、元寇防塁の第二次防御線とする可能性が指摘されている。

９次調査では、１２世紀後半～１３世紀前半期に形成されたとされる整地層が検出されている。該期～近世の遺構は、この層の上面で検出されている。この調査区は、今回報告の１６、１８次調査区の西側７０ｍほどに位置する。１６、１８次調査で検出された包含層につづいてくるものであろう。ただ、１６、１８次調査区では、９次調査区で見られたような、１３世紀代の多量の遺物の出土はなく、ごく小量の１２世紀後半～１３世紀前半期の遺物を下限として、



1．藤崎遺跡　2．西新町遺跡　3．有田・小田部遺跡群　4．原遺跡群　5．原東遺跡群
6．飯倉遺跡群　7．別府遺跡　8．茶山遺跡群

Fig.1 藤崎遺跡周辺遺跡分布図（1：25,000）



凡　例

a．第１地点（明治45年　箱式石棺出土地）
b．第２地点（大正６年　昭和５年箱式石棺・甕棺墓出土地）
C．第３地点（昭和33年　甕棺墓出土地－旧刑務所内遺跡）
d．第４地点（昭和50年代発見地）

1．第１次調査区	7．第７次調査区	13．第13次調査区
2．第２次調査区	8．第８次調査区	14．第14次調査区
3．第３次調査区	9．第９次調査区	15．第15次調査区
4．第４次調査区	10．第10次調査区	16．第16次調査区
5．第５次調査区	11．第11次調査区	17．第17次調査区
6．第６次調査区	12．第12次調査区	18．第18次調査区

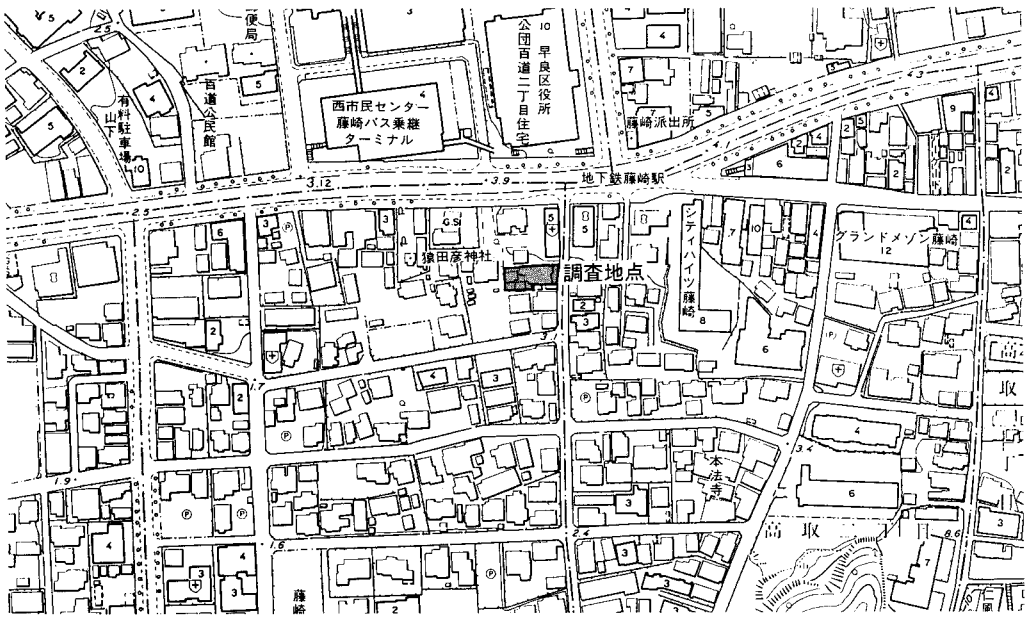
Fig. 2　藤崎遺跡位置図（１：5,000　黒塗部が今回報告の地点）

7～8世紀代の遺物を多量に含んでいる。9次調査でも指摘されているが、包含層形成時期が、一時期でないことを示しているかもしれない。

地点名 調査次数	旧地点名	所在地	面積	調査期間	事業名	時代	遺構	報告書	備考
第1地点	第1地点	福岡市早良区藤崎1丁目14		明治45年 3月19日	川圧岩五郎氏宅	古墳時代	箱式棺	註1	三角縁二神龍虎鏡　素環頭大刀
第2地点	第2地点	福岡市早良区藤崎1丁目38		大正6年 昭和5年	村上研究所	弥生時代～ 古墳時代	箱式石棺 甕棺墓	註2 137集	方格渦文鏡
第3地点	第3地点	福岡市早良区百道2丁目3		昭和30年代	旧刑務所	弥生時代	甕棺墓	62集	
第4地点	——	福岡市早良区高取2丁目17		昭和50年	井戸堀削	弥生時代	甕棺墓　1基	138集	彩文土器 （壺）
第1次	第4地点	福岡市早良区百道（旧西区役所前）	4.952㎡	昭和52年4月～昭和53年6月	高速鉄道 （地下鉄）	弥生時代～ 中世	甕棺墓　91基 石棺墓　4基 土壙墓　23基	62集	特殊墓…1基 住居跡…12基
第2次	第5地点	福岡市早良区高取2丁目17	439㎡	昭和52年8月15日～9月15日	テナントビル	弥生時代～ 中世	方形周溝墓　1基 甕棺墓　60基 土壙墓　9基		
第3次	第6地点	福岡市早良区百道2丁目2-807	2.700㎡	昭和55年4月14日～7月31日	9基バスターミナル	古墳時代初頭 奈良～中世	方形周溝墓　9基 土壙　34基 住居跡　7基	80集	三角縁二神二車馬鏡 珠文鏡
第4次	第7地点	福岡市早良区百道2丁目	約143㎡	昭和55年5月19日～5月28日	地下鉄出入口A	古墳時代初頭	方形周溝墓　1基 甕棺墓　2基	80集	変形文鏡
第5次	第8地点	福岡市早良区藤崎1丁目1	約101㎡	昭和55年 5月29日	地下鉄出入口B	弥生時代前期	甕棺墓　2基 石蓋土壙墓　1基	80集	
第6次	——	福岡市早良区高取2丁目18	約150㎡	昭和57年 12月	地下鉄出入口C	弥生時代	甕棺墓　5基		
第7次	——	福岡市早良区藤崎1丁目1	200㎡	昭和58年7月25日～8月26日	整骨院増築	弥生時代	甕棺墓　19基 土壙　12基	137集	
第8次	——	福岡市早良区高取2丁目144-145	532㎡	昭和58年10月18日～11月11日	テナントビル	弥生時代～ 中世	溝　2条 井戸　1基 甕棺墓　2基	138集	
第9次	——	福岡市早良区藤崎1丁目2-29	244㎡	昭和58年12月26日 昭和59年2月8日	賃貸住宅	弥生時代～ 中世	方形周溝　1条、溝　4条、土壙　52基、住居跡　3軒	137集	
第10次	——	福岡市早良区高取2丁目146地	1,963㎡	昭和60年1月23日～2月14日	分譲住宅	弥生時代～ 中世	方形周溝　1条、溝　2条、甕棺墓　6基、井戸　1基	138集	
第11次	——	福岡市早良区高取2丁目	443㎡	昭和60年10月23日～11月19日	テナントビル	弥生時代～ 中世	甕棺墓　4基 溝　3条	138集	
第12次	——	福岡市早良区高取2丁目142	657㎡ （300㎡）	昭和63年5月25日～6月15日	大賀学氏			232集	
第13次	——	福岡市早良区高取2丁目165	413㎡ （372㎡）	昭和63年3月16日～7月26日	前田サヨ氏	弥生時代～ 近世	甕棺墓　32基 土壙　10基 箱式石棺墓　1基 住居跡井戸溝　2基 方形周溝墓　1基	232集	
第14次	——	福岡市早良区高取2丁目140外	413㎡ （102.2㎡）	昭和63年6月18日～6月25日	内山潔氏	中世～近世	住居跡 溝　1条 土壙　1基	232集	
第15次	——	福岡市早良区藤崎1丁目11-1	287㎡ （204.3㎡）	平成1年6月9日～6月26日	㈱じゅう	古墳時代～ 奈良、平安	土壙、箱式石棺、住居跡　1軒、溝　2条	本書	
第16次	——	福岡市早良区藤崎1丁目1-60	147㎡ （70㎡）	平成1年9月7日～9月14日	三谷昭臣氏	8C前	溝　2条 土壙　1基	本書	
第17次	——	福岡市早良区藤崎1丁目119・120	176.02㎡ （120㎡）	平成1年12月19日～12月23日	笹林宏子氏	7C初～ 13C	炉跡　5基 井戸 住居跡	本書	
第18次	——	福岡市早良区藤崎1丁目59	126.24㎡ （66.2㎡）	平成2年3月1日～3月7日	崎山健二氏	古墳時代後期 ～中世	溝、住居跡、棚列 掘立柱建物	本書	

註1　島田寅次郎「藤崎の石棺」『福岡市史跡名勝記念物調査報告書』第1号　1925
註2　中山平次郎「古支那鏡鑑治革」考古学雑誌第9巻3号　1918
註以外はいずれも、福岡市埋蔵文化財報告書である。

第 15 次 調 査



第15次調査位置（1：4,000）

調査番号　8922

遺跡番号　FUA-15

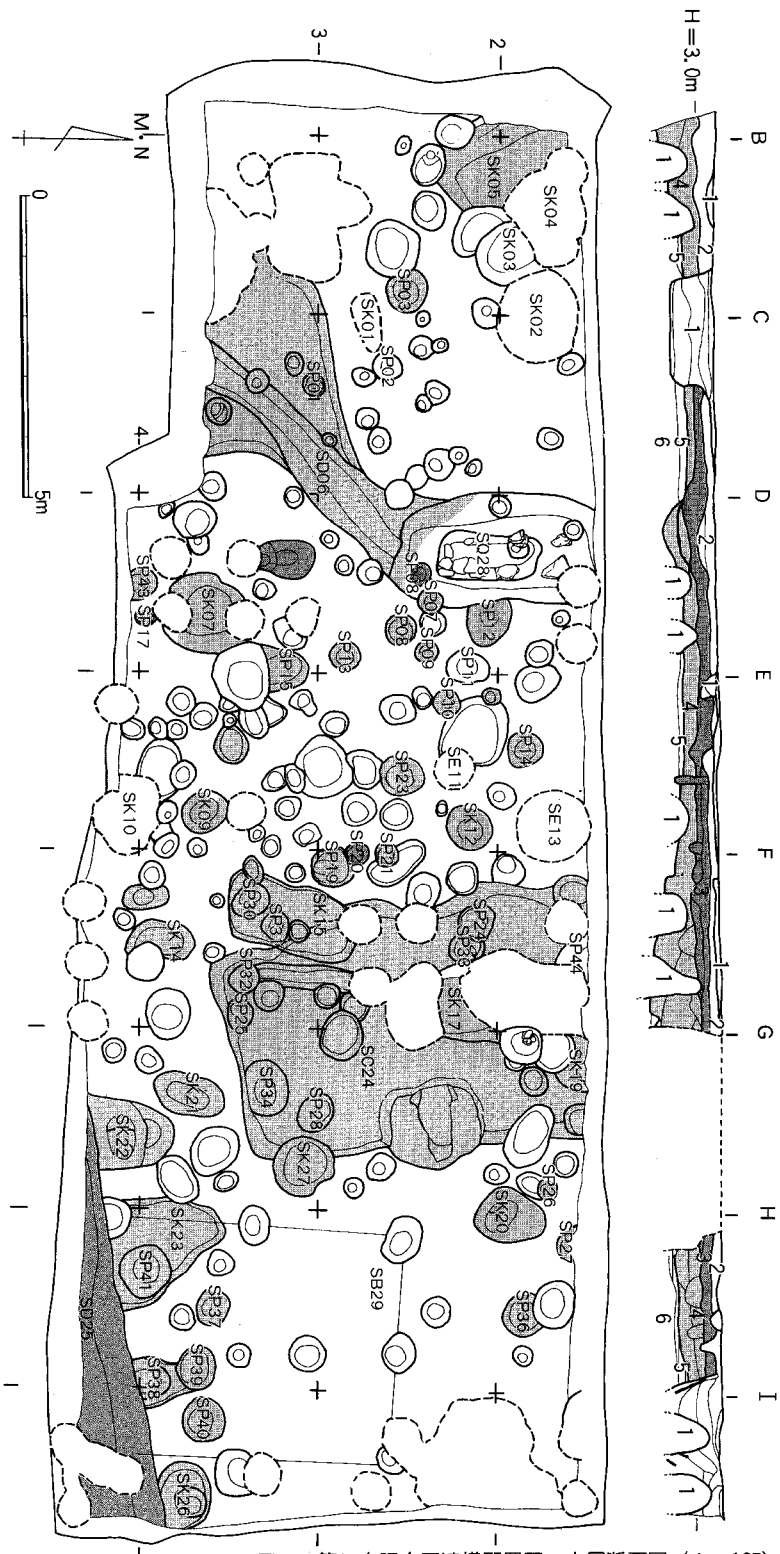


Fig. 3 第15次調査区遺構配置図・土層断面図（1：125）

Fig. 4 調査区遠景（東から）

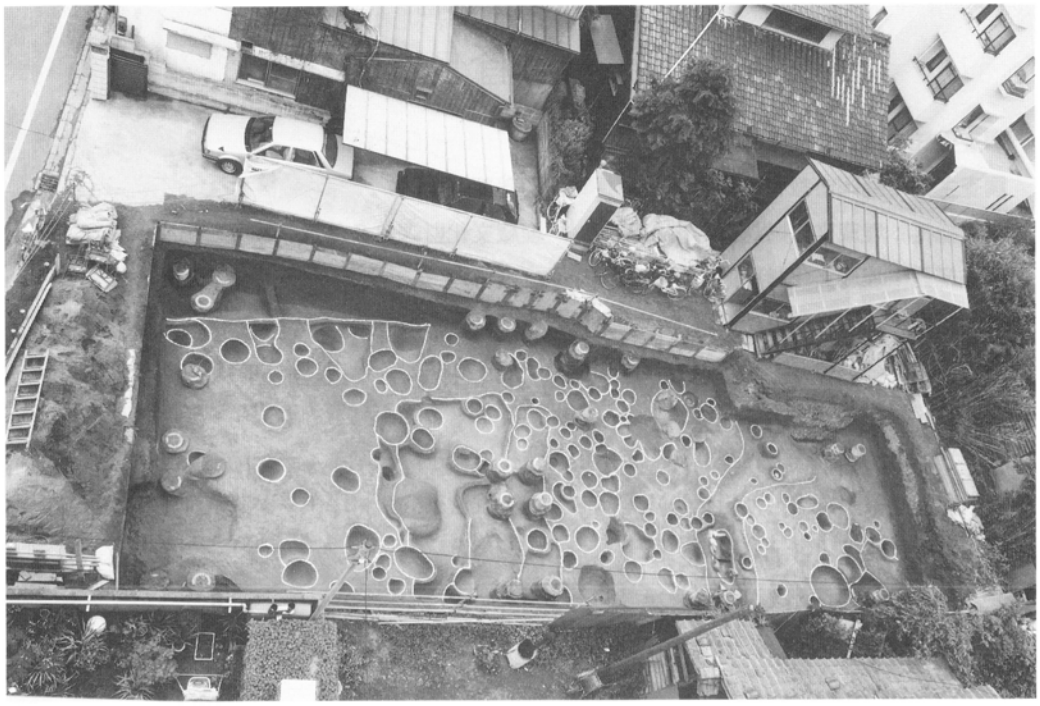


Fig.5 調査区全景（北から）

1　調査に至る経過

今回の調査は平成元年２月１日、株式会社「じゅう」よりの早良区藤崎一丁目11－１地内での共同住宅建設に関して事前審査願いの提出に始まる。受付番号は63－２－530である。

これを受け埋蔵文化財課では遺跡包蔵地内（藤崎遺跡群）である事を確認、早速同年２月14日に試掘調査を行った。結果、表土下110cmの砂層上面で柱穴群を検出、遺跡の存在を確認した。

同課は申請者と現状での保存が可能か協議を重ねたが、結果、工法的に不可能と判断、よって申請者の費用負担で発掘調査による記録保存を行う事となった。

調査は同年６月９日より同６月26日まで行われた。調査面積は204.3㎡である。

尚、調査に際し、申請者株式会社じゅうと、株式会社馬場組には多大な御理解と御協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

調査番号	8922	遺跡略号	ＦＵＡ－１５
調査地地籍	早良区藤崎１丁目11－１	分布地図番号	81－Ａ－１
開発面積	287㎡	調査実施面積	204.3㎡
調査期間	890609～890626	事前審査番号	63－２－530

2　調査体制

調査委託：株式会社じゅう

調査主体：福岡市教育委員会　教育長　佐藤善郎（当時）

調査総括：埋蔵文化財課長　柳田純孝　　埋蔵文化財課第２係長　柳沢一男

調査庶務：埋蔵文化財課第１係　安倍　徹（当時）

調査担当：埋蔵文化財課第２係　加藤良彦

調査協力：高浜謙一　瀬戸啓治　百武義隆　黒田和生　英豪之　溝口武司　松井邦子
松井フユ子　西尾タツヨ　佐藤テル子　金子由利子　堀川ヒロ子　清原ユリ子
門司弘子　舎川春江　柴田常人　松尾鈴子　松尾キミ子　高田マサヨ

資料整理：平川敬治（九州大学）　窪田慧　小城信子　木村厚子　国武真理子　池田初実
能美須賀子　楢崎多佳子

3　調査の記録

調査の概要

本調査区は東西方向に延びる砂丘を少し南に下った砂丘後背の緩斜面に位置し、弥生中期の甕棺19基を検出した第７次調査区の南隣に当たる。

土層断面（Fig. 3）は表土下70～100cmまでが黒灰色土と明赤褐色粘土の厚い近・現代の造成土。95～110cmが黒褐色砂質土の近世包含層、110～120cmが暗灰褐～暗褐色砂質土の中世包含層、130～140cmまでが黒褐～暗黄褐色混土砂の弥生～古墳時代包含層で、遺構検出はこの面から行った。以

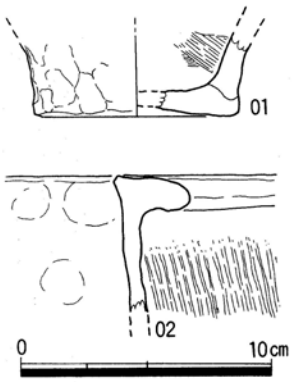


Fig. 6　弥生土器実測図（１：３）

Fig. 7　SQ28主体部（南から）

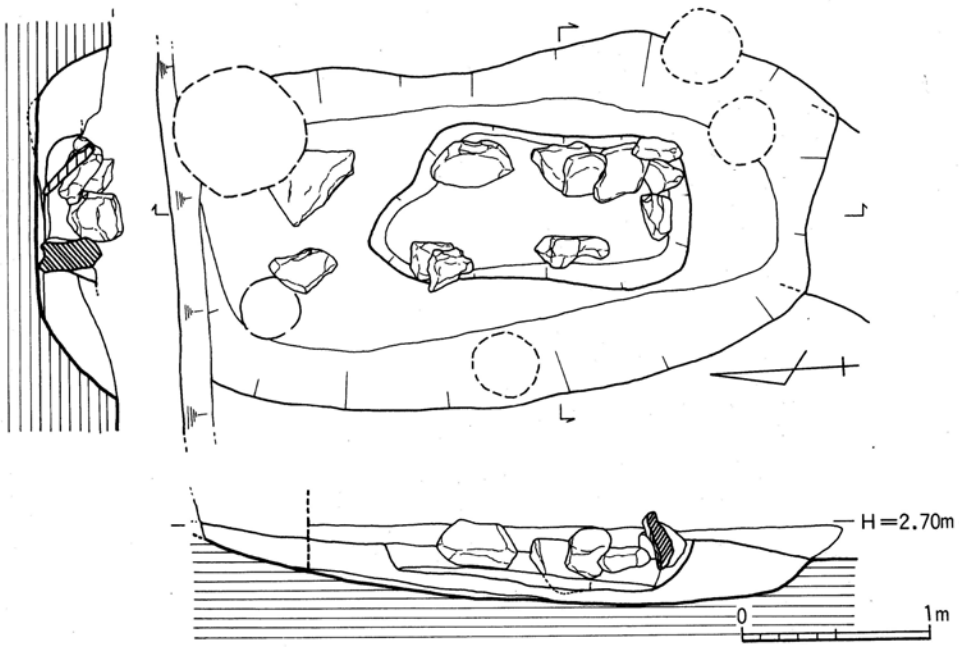


Fig. 8　SQ28実測図（１：40）

Fig. 9 SQ28主体部完掘状況（南から）

Fig.10 SQ28掘方完掘状況（南から）

下は黄灰色中砂、淡黄灰色粗砂の基盤層となる。

検出した主な遺構は弥生時代の箱式石棺１基、古墳時代の土壙17基、竪穴住居址１戸、溝１条、掘立柱建物１棟、中世の土壙１基、溝１条である。

遺物は弥生前期土器から古墳時代土師器・須恵器、古代末～中世の中国製陶磁器、近世の肥前系陶磁器を検出しており、総量でコンテナ２箱分である。

１、弥生時代の調査

箱式石棺ＳＱ28（Fig. ７～10）

調査区北東側で検出され、７世紀後半代の溝SD06に切られ撹乱を受けている。石棺は内法で150×55cmを測り、内部には溝と同様の黒灰色砂質土が充満する。石材の半量近くが抜き取られ一部上面に散乱している。石材は玄武岩・花崗岩・砂岩の自然礫が用いられているが玄武岩が多い。これを５～６個並べ側辺を構成し、小口石をはさみ込んでいたと考えられる。小口部には一部青灰色粘土が残っていた。方位はＮ－４°－Ｅにとる。

掘り方は2.3×1.2mを測かり、棺に対し大き過ぎる観を免れず、別個の遺構の切り合いの可能性も考えられるが、棺の深さ・方向とも近く、堀り方と判断した。覆土は暗黄灰色混土砂である。主体・堀り方ともに遺物の検出は無いが、棺材の大きさ組み方等から弥生時代と考えられる。

遺物（Fig. ６）

遺物は少なく、この２点のみである。01は中世の溝SD26中より検出した前期前半の甕底部でスサを入れたのか、小さな気泡が多数入っている。外面は指頭圧痕が多数残り、ヨコに粗くナデている。内面はヨコ板ナデ後粗いヨコ指ナデを施す。

02は中期前半の甕口縁部で0.5～１㎜前後の石英粒を多量に含む。口縁外面下は粗いタテハケ、以上はヨコナデ、内面には指頭圧痕が残り、ヨコナデが施される。

2、古墳時代の調査

竪穴住居址ＳＣ24（Fig.11～14）

調査区中央より北東寄りで検出された。北辺が調査区外で全容ではないが、5.80×4.60mの長方形を呈し、深さ57cmを測かる。長軸をＮ－10°－Wにとる。主柱穴は対称を成さないが、４本柱と思われる。砂上の立地であるため柱痕跡の検出は困難であった。柱の堀り方は浅く10～30cmで径は35～70cmを測る。

東壁の中央部に1.65×1.55mの隅丸方形の竈がもうけられており、煙出し部が30cm程外方に突出している。内法で124×76×44cmを測かる。横断土層（Fig.11・14）を観察すると竈の天井部以下は包含層及び基盤層であり、住居掘削時に削り出された事が知られ、天井部のみ黄灰色粘土で成形されている。また、横断面の焼土部分が逆「T」字状になっており、一度天井が崩落後、しばらく使用した後修復したものと考えられる。縦断面でも竈内の床面が20cmかさ上げされている（Fig.11、ｄ層）。

柱穴は一ヶ所で２～３個まとまり、南西側の溝は壁から離れており、竈の修復状況等を考え

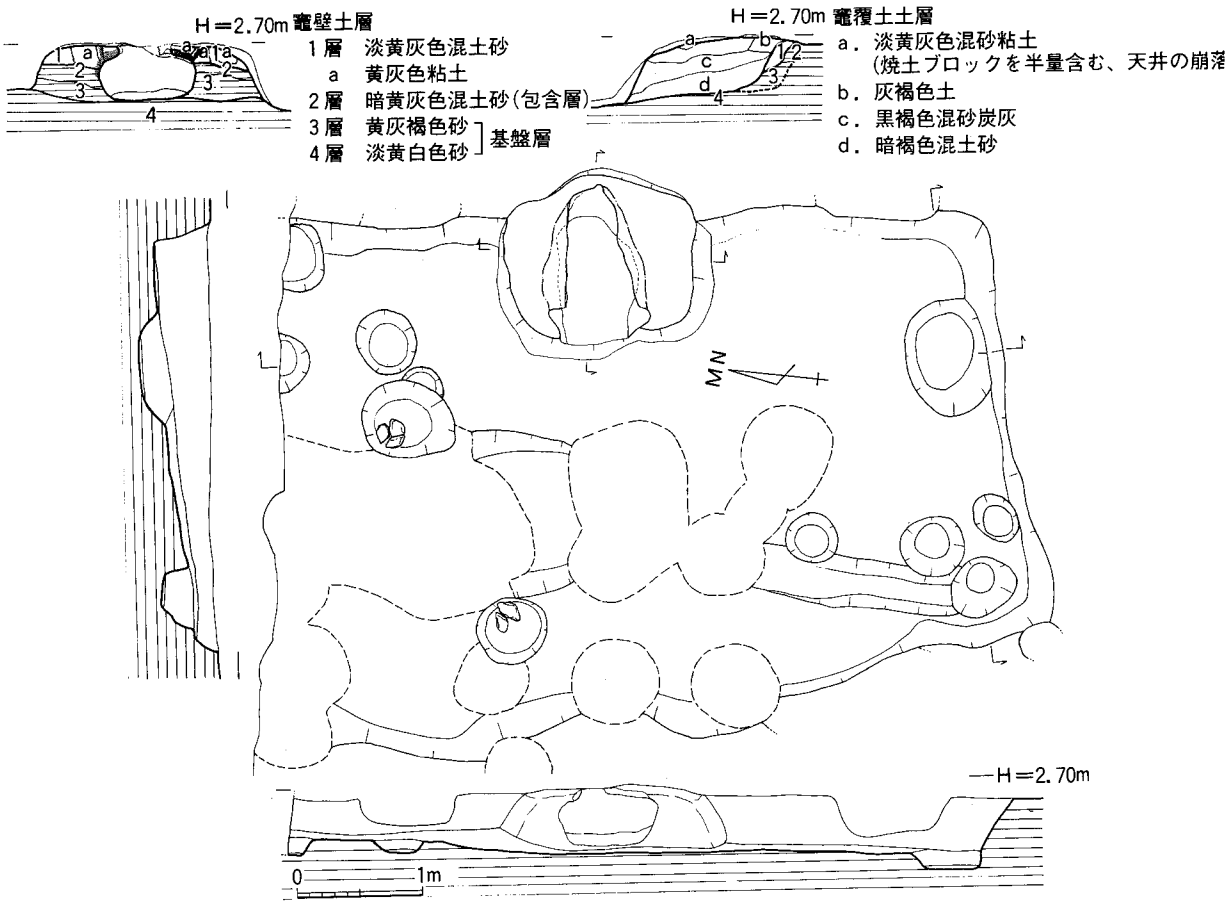


Fig.11 SC24実測図（１：60）

Fig.12 SC24完掘状況（南から）

Fig.13 5C24竈（西から）

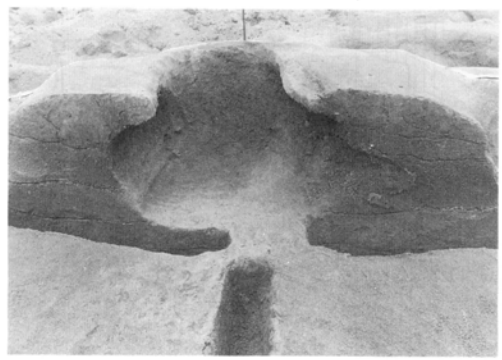


Fig.14 竈横断面（西から）

合わすと、１～２回の建て替えが行なわれたと考えられる。

遺物（Fig. 24）

８・11・12は須恵器である。８は短頸壺で口径7.2胴径10.3cmを測る。外面頸部下は回転カキ目調整、口頸部と内面は回転ナデである。11は坏で受部径10.7cm、器高3.0cm、体部1/2下は回転ケズリである。底部外面にヘラ記号が有る。焼成はややゆるい。12は坏蓋で小片である。調整は回転ナデで、外面上端にヘラケズリ痕が残る。10は土師器高坏脚部で外径で14.8cmを測る。調整はヨコナデで外面に一部赤色顔料が残存する。９は管状土錘で8.2×2.3cmを測り円柱状

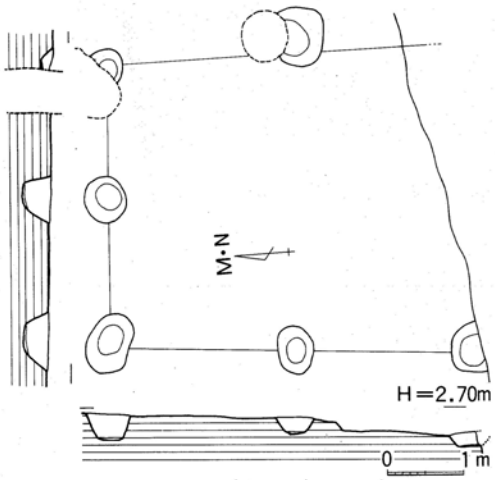


Fig.15 SB29実測図（1：100）

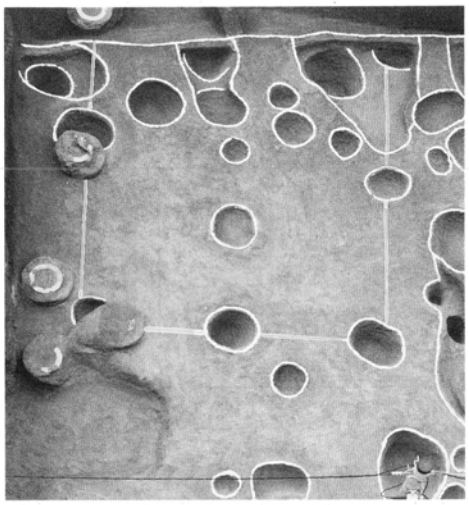


Fig.16 SB29（北から）

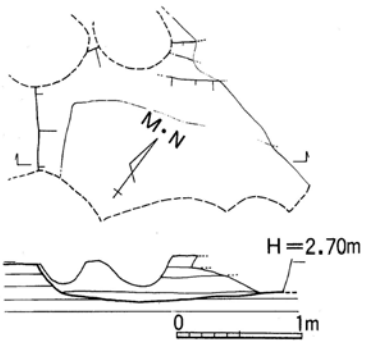


Fig.17 SK05実測図（1：60）

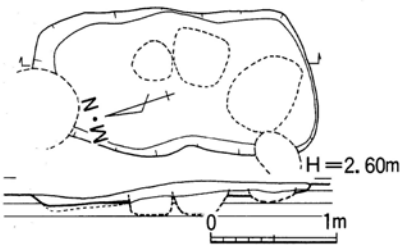


Fig18 SK15実測図（1：60）

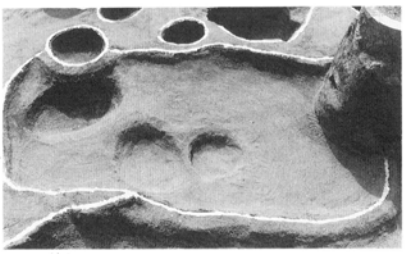


Fig.19 SK15（東から）

を成しており、両端部が使用により欠落している。全面に指頭圧痕が残る。重量37ｇ、竈壁内より出土。他に鍛冶滓と思われる鉄滓を１点検出している。

掘立柱建物ＳＢ29（Fig.15、16）

調査区南東部で検出され、中世の溝SD25に切られる。２間×２間以上の建物で、方位をＮ－２°～４°－Ｅにとる。検出部で梁間3.5m、桁行4.7mを測る。柱穴堀り方は径50～60cm、深さ15～35cmを測る。遺物の検出はないが、覆土の状況から古墳時代と考えられる。

土壙ＳＫ05（Fig.17）

BIグリッドに位置し、調査区外と撹乱のため全容が明らかでないが、残存部で2.20×1.95mを測る方形の土壙で、竪穴住居址の可能性も考えられる。長軸をＮ－40°－Ｗにとり深さ36cmを測る。

出土遺物（Fig.24）

03.05は土師器坏で、03は口径11.7、器高4.4cmを測る（Fig.22）。外面上半はヨコハケ後、ゆるいヨコナデ、下半は手持ちヘラ削り後部分的にナデる。内面もヨコハケ後ゆるいナデ調整である。焼成後の使用痕が特異であり、刃物の刺突によると思われる細かな剥離痕が口縁上面と内部下半に無数に付き、殊に底面は器

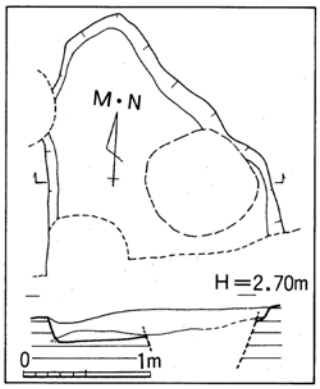


Fig.20 SK23実測図（1：60）

Fig.21 SK23（東から）

表が残らない程使用され、同様の道具で穿孔もなされている（Fig.23）。同様の使用痕は20の坏にも見受けられ、甕の口縁内面にも付くものがある。04は須恵器高坏で底径で6.6cmを測る。外面底面は回転カキ目で体部に3条の沈線を施す。内面は回転ナデで底面はタテにナデる。

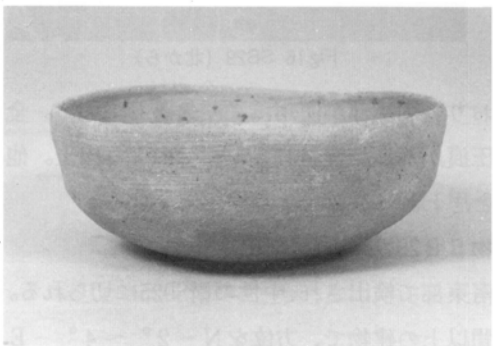


Fig.22 土師器・03

ＳＫ15（Fig.18・19）

SK15はSC28の南西側でこれを切っている。2.28×1.18×0.30mを測る。廃棄物処理用の土壙であろう。Ⅵ期の坏が出土している。

ＳＫ23（Fig.20・21）

SK23は調査区の南東部にありSB29を切り、SD25に切られている。1.1×0.86×0.28mの不整形で、同じく廃棄物の処理用と思われる。図化可能な遺物は無いが、須恵器坏と軟質土器系の土師器甕・軽石を検出している。

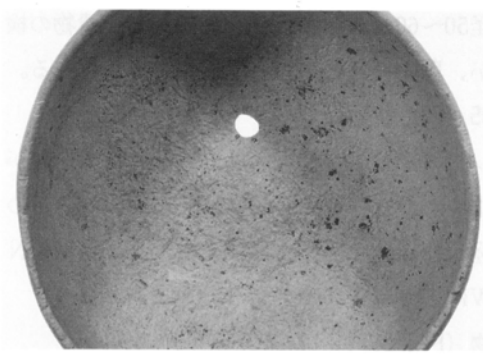


Fig.23 土師器・03使用痕

溝ＳＤ06（Fig.3）

D1～C3グリッドにあり、SQ28を切る。N－35～40°－Eの方位にゆるい逆「S」字形で調査区を横断している。幅100深さ27cmを測る。須恵器Ⅱ期の甕・Ⅳ期の坏・坏蓋、土師器甕を検出している。遺物の検出はないが、これに切られる方形土壙は住居址の可能性も考えられる。

その他の遺物（Fig.24）

13～15は柱穴からの出土。13は土師器甑の口縁部で、口唇部に沈線2条、体部は木目直交の縦位の平行叩がなされ、凹線を1条施す。内面はこれを受けての平行弧線の当て具痕が残り、ケンマ様の丁寧なヘラナデで仕上げられる。須恵器様の技法で成形されており、同種の完形品

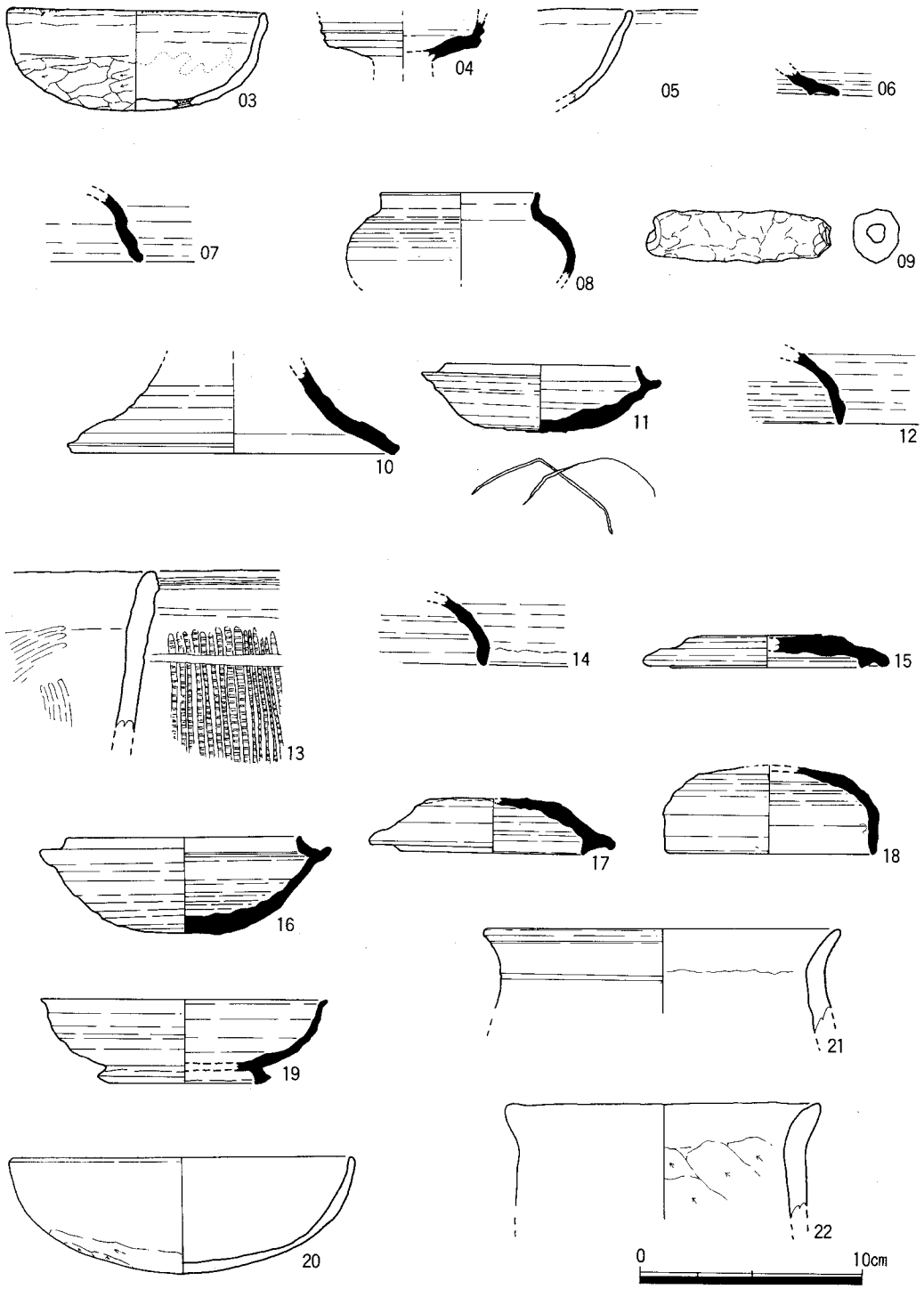


Fig.24 古墳時代遺物実測図（1：3）

が名切谷遺跡から出土している。(註1) 14・15は須恵器坏蓋、15は口縁外径11.1器高1.5cmを測る。天井部はヘラ切り、体部は回転ナデで仕上げられる。焼成は不良。

16～22は包含層出土の遺物である。16～19は須恵器で、16は口縁外径で13.0器高4.3cmを測る坏。体部は回転ナデで仕上げられ外面の1/3以下は回転ヘラケズリである。17は坏蓋で口縁外径で11.0器高2.4cmを測る。体部は回転ナデで仕上げられ、天井部はヘラ切りである。18は壺蓋で口径9.7器高4.0cmを測る。体部は上から1/2まで回転ヘラケズリが成される。19は高台坏で口径12.9底径7.9器高3.8cmを測る。回転ナデで仕上げる。20～22は土師器で、20は坏。口径15.2、器高5.2cmを測る。外面上半はヨコナデ下半は手持ちヘラケズリが施される。内面には03と同様の刃物による刺突痕が無数に付く。21・22は土師器甕で21は口径14.2cm、22は16.0cm、口縁と外面はヨコナデ、内面頸部下はナナメ方向のケズリがなされる。

3、古代末～中世の調査

土壙ＳＫ08 (Fig.25)

SK08はD3グリッドに位置し、主軸を南北方向にとる。北端を杭に切られるが、0.88×0.60×0.17mを測る。

出土遺物 (Fig.29)　23は龍泉窯系青磁碗の口縁部小片で釉は淡オリーブ色で細かな貫入が入る。胎土は淡黄灰色でやや生目が粗い。口縁部外面に２条、内面に１条の圏線を施し、下に片切り彫りの蓮華文が施文されている。

溝ＳＤ25 (Fig.26～28)　Ｇ～Ｉ－３グリッドの調査区南東端に位置し、方位をＮ－79°－Ｅにとる。溝の北半部のみの検出であるが、土層断面から判断すると、幅約２ｍ、深さ90cm程のＶ字溝になると思われる。遺構の堀り込みは検出面より40cm程上方、表土下80cm程の３層中からである。

出土遺物 (Fig.29)　24は北宋後半代の白磁碗底部。径5.8cm。乳白色の半濁した釉が高台外面までかかる。胎土は淡灰色で小さな気泡が残る。見込に片切彫の圏線を１条施す。25は龍泉窯系の青磁碗の胴部小片。釉は淡青オリーブの透明釉で、胎土は黄味がかった灰色、黒色の微砂粒を小量含み若干粗目。外面に鎬入り複弁の蓮花文を施す。26も同じく龍泉窯系の青磁碗。釉は淡オリーブの透明釉で細かな貫入が入る。胎土は黄味がかった灰色で若干粗目。外面は線彫りの蓮花文、内面は雲文様の線彫りがなされる。他にも糸切り土師器皿等を検出しているが、小片で図示し得ない。

その他の遺物 (Fig.29)　27はSP18出土の土師器坏で口径14.2底径9.0器高2.6cmを測る。体部は直線的に延びる。底面は糸切りで板圧痕が残る。28～30は包含層出土。28.29は体部が内湾気味に立ち上がる土師器坏で28は16.0×11.2×2.6cmを測り底面は糸切り。29は15.7×10.1×2.6cmを測り、底面は糸切りで板圧痕が残る。30は瓦質の火舎で、内外面とも暗褐色を呈する。口縁内外面は回転ナデで外面には炭化物が付着する。内面口唇部は鍋等が接したのか摩滅して

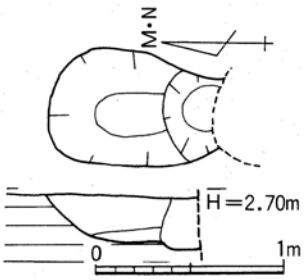


Fig.25SK08実測図（1：40）

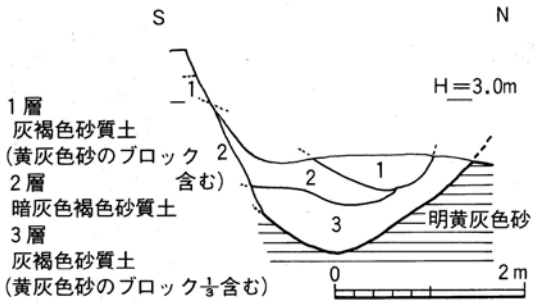


Fig.26 土器断面図（1：40）

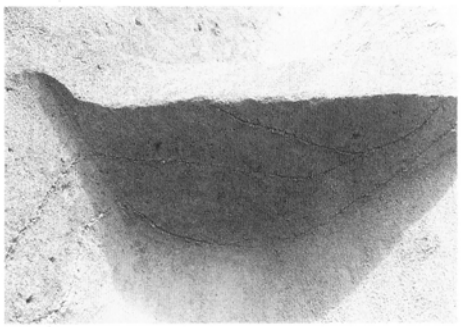


Fig.27 SD26土層断面図（東北より）

Fig.28 SD26全景（西から）

いる。肩部外面はカキ目調整、内面は回転ヘラナデが施される。

4、漁撈具（Fig.30）

今回の調査の検出遺物中最も目立ったもので、土錘と石錘が有る。包含層からの検出が多いがSK5・14・21・SC24等8基の古墳時代後期の遺構から検出されており、大部分は中世よりも該期に属するものと考えられる。

土錘は総数で29点、全て管状土錘で形状が円筒形を成すもの34・35とゆるい紡錘形を成すもの、重量23～38gの大型品31～34、重量16～18gの中型品35・36と8～10gの小型品37～39の別が有る。また軸の直交方向に多数の擦痕を有するもの31・33・34・35・36と無いものが有り、小型品には擦痕は見受けられない。使用法（漁法）の違いに起因するものと思われ、前者は曳き網漁に後者は差し網漁に用いられたものと考えられる。(註2)

それぞれの法量は31が8.3×2.1cm重さ26g、32は7.2×2.5cm重さ38g、33は7.5×2.0cm重さ23g、34は6.4×2.0cm重さ37g、36は5.6×2.6cm重さ48g、37は6.3×1.5cmで10g、38は6.0×1.3cmで8g、39は5.5×1.3cmで10gを測る。

35はSP13、36はSD25、37はSP25からの出土で、他は包含層からの検出である。

40～42は石錘で3点とも包含層からの検出。全て自然の円礫の一面を磨り取る事によって平滑面もしくは凹面を作り出したもので、敲打痕が全くなく、一般の磨石と区別される。

40は淡緑灰色の砂岩を用いたもので7.2×2.3×1.1cm重さ28gを測る。下面の長軸方向と両側面の中央・上面の上下端の短軸方向に磨り取りによる浅いくり込みを施し、上面は長軸方向に擦痕が見られる。41は3.0×2.7×2.6cmの花崗岩の円礫の下面を平滑に磨り取ったもので27gを測る。上部は細かな割れ

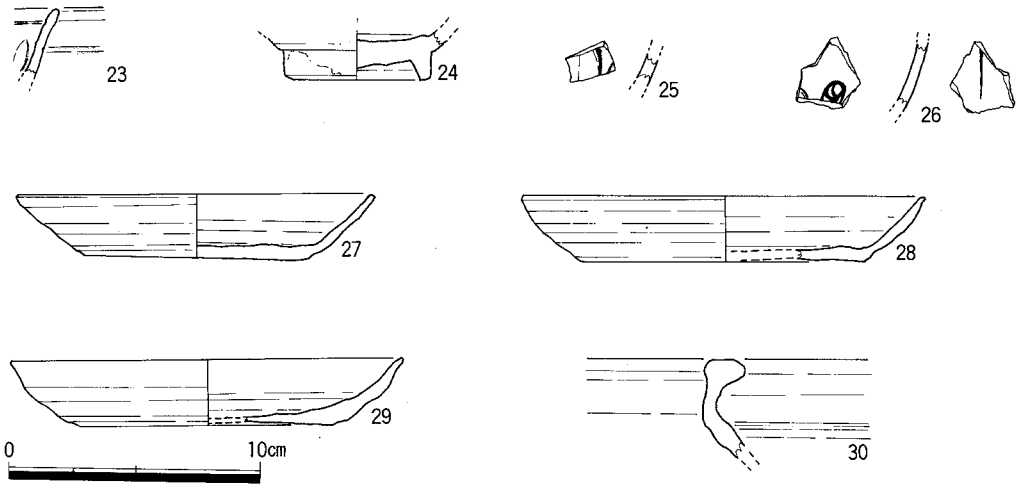


Fig.29 中世遺物実測図（1：3）

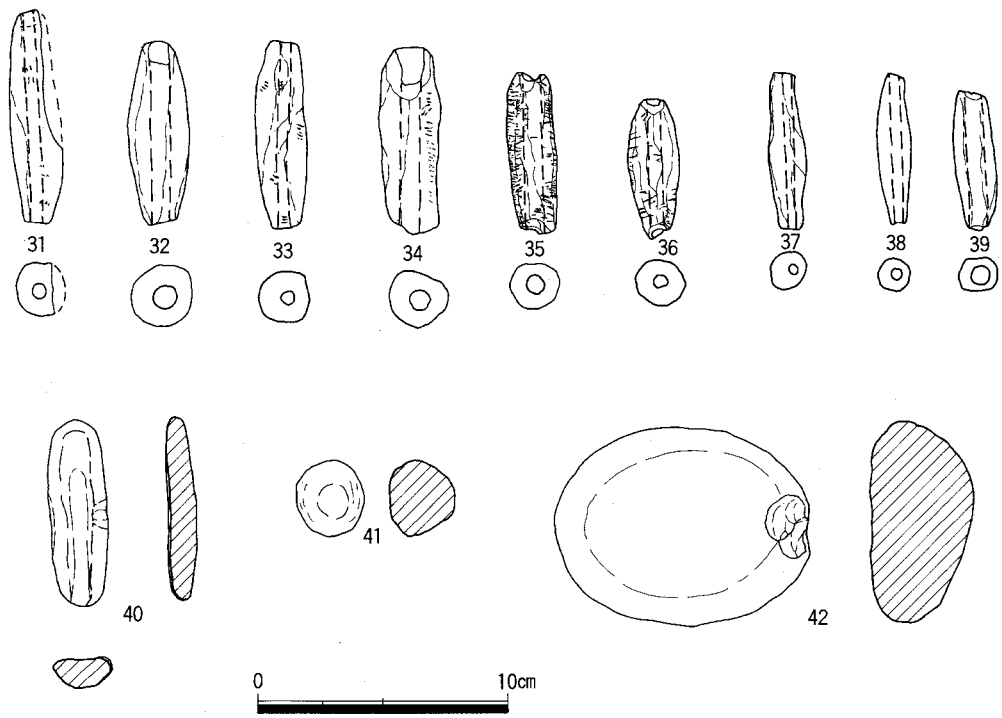


Fig.30 漁撈具実測図（1：3）

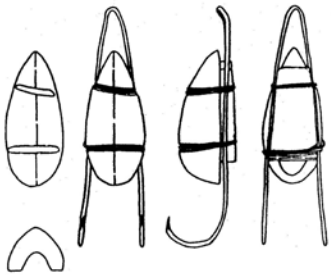


Fig.31　タコ手釣漁具（註３ 図５より）

と擦痕が見られる。42は10.1×7.8×4.1cmの安山岩円礫で同じく下面を平滑に仕上げる。重量489ｇ。一側縁の両面に打ち欠きを施す。上面は短軸方向に擦痕が見られる。

41・42は他の用法の可能性も考えられるが、40は台木に鉤とともに固定しタコ手釣の漁具の石錘として用いられた可能性が高く（Fig.31）、擦痕の有無からして曳き漁具と考えられ、同様のものが西新遺跡の古墳時代初頭の遺構から出土している。(註3)

Fig.32 土製猿実測図（１：２）

5、土製猿（Fig.32）

包倉層からの検出で、淡桃褐色の土師質である。胴下半と鼻を欠く。ヘラで整形後粗くナデられ、目・口は三角錘状の工具で一気に造作されている。全高で3.0顔幅で2.6cmを測かる。顔の真下にくぼみが作られている。突き出した顔の造形から猿を模したものと思われる。付近に近世鎮座の猿田彦神社が有るが、胎土、風化の度合いから判断すると中世以前の可能性が高い。

4　小結

1.　弥生時代は箱式石棺１基を検出。甕棺墓群は北の７次調査区で南限である事が確認できた。箱式石棺墓は第13次調査と銅鏡を検出した第１・第２地点の石棺を結ぶ東西のライン付近に位置し、墓域の南限と思われる。

2.　古墳時代は後期のみで７世紀代が主体を占め中でも後半～末が多い。竪穴住居址は本調査区と第３次、第９次調査区のみで検出されており、遺跡群の西部に散漫に集落が広がっている様である。出土品は漁撈具が目立ち、漁業を主とするものと思われる。

3.　奈良時代の遺物・遺構の検出はなく、12世紀後半～13世紀代の遺構遺物を検出している。溝SD25は13世紀代でこれは本調査区から南に直角に折れ、16・18次調査区へと延びており、一区画を成し、殊に18次調査では溝の内側で柵列を検出しており防御的な色彩を帯びる。これに伴う遺構は本調査区から南東に広がるものと思われる。

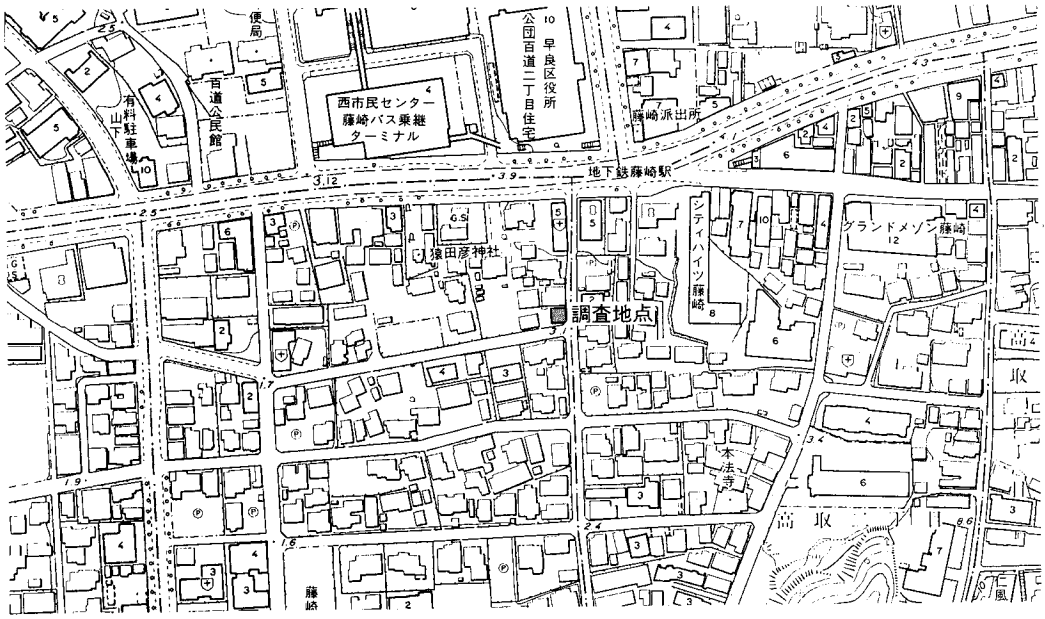
遺物の量としては12世紀後半～末のものがまとまっており、これから13世紀代まで続いたものである可能性も考えられる

遺構一覧表

No.	グリッド	時　　期	規模　長辺×短図×深　（底面標高）m	出　土　遺　物
SK01	C2	現　代	0.98×0.40×0.24(2.45)	土師器、須恵器坏、近世陶器、レンガ、犬骨、鉄釘
SK02	B～C1	近・現代	1.58×1.12×0.38(2.34)	焼台（窯道具）
SK03	B1	古墳時代後期	0.96+α×1.06+α×0.3(2.34)	土師器坏、甕
SK04	B1	近・現代	1.66+α×1.20+α×0.59(2.13)	土師器竈、甕、近現代陶器、ガラス瓶
SK05	B1～2	古墳時代後期（7世紀）	2.20+α×1.95+α×0.36(2.39)	土師器坏、甕、須恵器高坏、甕、土錘、近世擂鉢、鉄釘
SK06	C3～D2	古墳時代後期（7世紀）	4.80+α×1.00×0.27(2.47)	土師器竈、甕、須恵器坏、坏蓋、甕
SK07	D3	古墳時代後期	1.46+α×1.30×0.39(2.29)	土師器甕、坏
SK08	D3	13世紀	0.88+α×0.60×0.17(2.44)	土師器甕、須恵器甕、青磁碗
SK09	E3	古墳時代後期	0.78+α×0.68×0.25(2.29)	土師器甕、須恵器甕
SK10	E4	近・現代	1.34×0.68×0.47(2.05)	窯壁、肥前系染付皿、土師質甕、陶器植木鉢
SE11	E2	近・現代	0.68×0.64	土師器甕、須恵器壺、近・現代陶器皿
SE12	E2	古墳時代後期	0.80×0.70×0.28(2.29)	土師器甕、須恵器坏
SE13	E1	現　代	1.20×1.14	土師器甕
SK14	F3	古墳時代後期	1.14×0.56+α×(2.29)	土師器甕．坏、鉄製品、須恵器甕、土錘
SK15	F3	古墳時代後期（7世紀）	2.28×1.18×0.30(2.28)	土師器甕坏、須恵器坏
欠　番				
SK17	F2	古墳時代後期	0.95+α×1.34×0.26(2.29)	土師器甕
SK18	F1	古墳時代後期	2.12+α×1.14×0.19(2.13)	土師器甕、甑
SK19	G1	古墳時代後期（7世紀）	0.93+α×0.46+α×0.46(2.18)	土師器甕、須恵器甕．坏、鉄滓、赤焼き須恵器甕
SK20	F1	古墳時代後期	1.18×0.90×0.46(2.19)	土師器甕
SK21	G3	古墳時代後期	1.20×0.66×0.26(2.27)	土師器甕
SK22	G4	古墳時代後期	1.30+α×1.28×0.58(1.98)	土師器甕
SK23	H3	古墳時代後期	1.94+α×1.90×0.31(2.34)	土師器甕、須恵器坏、軽石
SK24	F~G1~3	古墳時代後期（7世紀）	5.80+α×4.60×0.57(2.10)	土師器甕、高坏、須恵器坏．壺、土錘、鉄滓
SD25	G～I4	鎌倉時代（13世紀）	5.50+α×1.14+α×0.61(2.18)	土師器坏．坩．甕、須恵器坏．坏蓋．甕、赤焼き須恵器甕、白磁碗、青磁碗、陶器、鉄滓、肥前系染付碗
SK26	I3	古墳時代後期	1.10+α×0.86+α×0.28(2.53)	土師器坏．甕．竈
SK27	G3	古墳時代後期	1.02×0.96×0.31(2.26)	土師器甕
SQ28	D1～2	弥生時代後期	3.45+α×1.80×0.55(2.18)	
SB29	H~I2~4	古墳時代後期	4.70×3.50×0.30(2.10)	

（註1）　「生松台」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 226集　1990年
（註2）　平川敬治氏の御教示による。
（註3）　「タコ手釣り漁における漁撈文化の一側面」平川敬治
「日本民族・文化の生成」1．永井昌文教授退官記念論文集　1988年

第 16 次 調 査



調査番号 8946

遺跡番号 FUA16

1　調査に至る経過

1989年、早良区藤崎一丁目60番地内における共同住宅建設に伴う事前審査願いが、三谷昭臣氏より提出された。これをうけて埋蔵文化財課において試掘調査を実施した結果、遺構が確認された。その後協議に入り、本調査を行うことで契約が締結された。なお調査は1989年の９月７日より９月20日にかけて行われた。

遺跡調査番号	8946		遺跡略号	ＦＵＡ－16	
調査地地番	福岡市早良区藤崎１－60		分布地図番号	81（室見）	
開発面積	147.69㎡	調査対象面積	147.69㎡	調査面積	70.0㎡
調査期間	1989年（平成２年）９月７日～20日		事前審査番号	１－２－117	

2　調査体制

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課第２係

調査総括　埋蔵文化財課課長　柳田純孝　　埋蔵文化財課第２係長　柳沢一男

調査庶務　安倍徹

調査担当　常松幹雄　池田祐司　長家伸

発掘作業　柴田常人　高田マサエ　舎川ハルエ　西尾タツヨ　松井フユコ　松尾キミコ　松尾スズコ

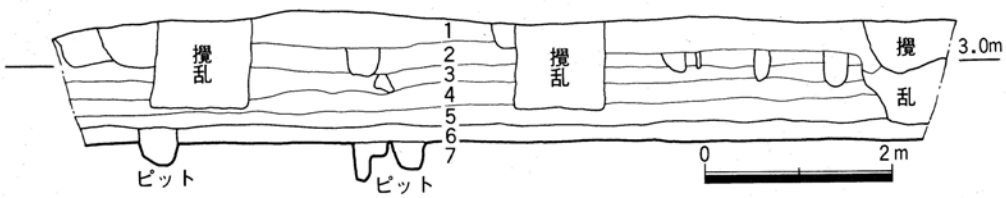
整理作業　太田頼子　太田次子　飯田千恵子　西原由規子　林由紀子　浜野年代　外村陽子

3　調査の記録

1　概要

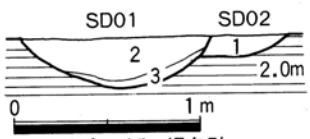
本調査区は、古砂丘の南側緩斜面に位置し、上下二面の遺構面が確認された。Ⅰ面（上面）は６層上面で、ほぼ南北方向に走る溝二条、土壙一基、及びピットが検出された。Ⅱ面（下面）は７層上面で、ピットが検出された。また上部包含層（２～５層）からは、須恵器、土師器、陶磁器等が出土した。下部包含層（６層）からも時期的にほとんど変わらないものが出土している。

Fig.33 第16次調査区遺構配置図（1：80）（アミ部はⅡ面遺構）



1．暗褐色砂（客土）　2．暗黒褐色粗砂(土器、炭化物を多く含む)　3．やや白っぽい褐色砂（土器、炭化物を若干含む）
4．暗褐色砂　　5．3よりやや暗い　6．暗黄褐色砂　7．黄白色砂（地山）

Fig.34 調査区西壁土層断面図（1：80）



1．やや白っぽい褐色砂
2．暗褐色粗砂
3．やや暗い黄白色粗砂

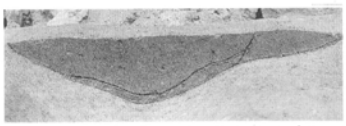


Fig.35 SD01・SD02. 土層断面図（1：80）

2　Ⅰ面の調査

Ⅰ面はＧＬ下１ｍで検出された。溝、土壙、ピットが検出されたが、溝以外は、遺構に伴う遺物は、ほとんど出土しなかった。

ＳＤ01、02（Fig.33･35）調査区中央をほぼ南北方向に走る溝である。18次調査地点につながる。SD01は、幅約１ｍ、深さ約30cmを測り、均整のとれた形状を呈している。北側に若干（10～15cm程）高くなる。SD02は、SD01の東壁をSD01にきられながら走っている。深さは検出面より10cm程を測る。土層観察より、SD01は、SD02を掘削しなおしたものとも考えられる。

00001～00008はSD01出土の遺物である（Fig.38）。00001～00003は須恵器の坏蓋で、端部を丸くおさめるものと、若干折り曲げるものの２種類がある。00004、5は、須恵器の高台付坏である。高台は、いずれも貼り付けである。00006～00008は土錘であり、重量は各々28ｇ、21ｇ、24ｇを測る。その他土師器、陶磁器片が出土している。00009、10、12、13、41は、SD02出土の遺物である（Fig.38）。00009、10は須恵器坏身である。00041は土師器甕で、内面はヘラケズリで、内底部にユビオサエ、外面は、ハケメののちナデで、口縁部にヨコナデを施す。00012、13は土錘で、重量は各々22ｇ、18ｇを測る。

ＳＸ01（Fig.36）調査区中央やや南に位置する。SD01、02に西半分を削平されるが、一辺2.4ｍほどの隅丸方形～長方形を呈すると思われる。断面は、浅い皿状で、底面は平坦である。覆土より土師器、須恵器の小破片が出土する。

3　Ⅱ面の調査

Ⅱ面は、Ⅰ面より20cmほどした黄白色砂の地山面で検出された。ピットは、配列状態が看取され、これを掘立柱建物（SB01）とした。

SB01（Fig.37）４間×２＋α間、桁間が広く、平面形が若干ひずむ。SP04より00014が出土（Fig.38）。土師器小形壷、内面ユビオサエ、外面縦ハケ、口縁部はヨコナデ調整を行う。

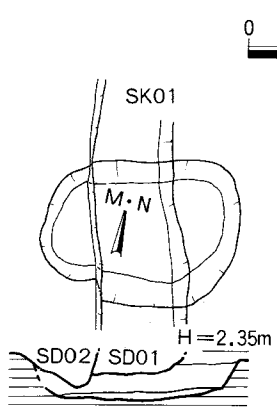


Fig.36 SX01実測図（1：80）

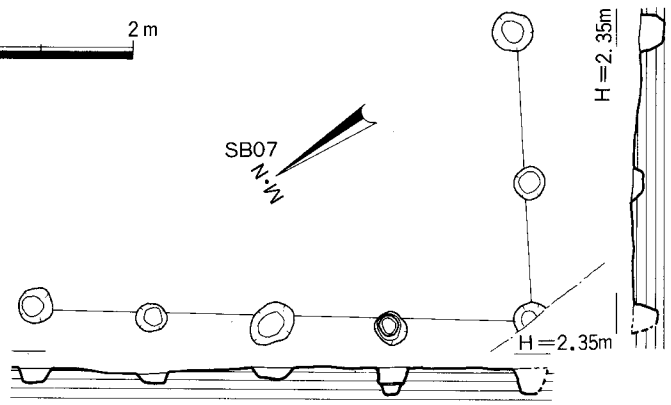
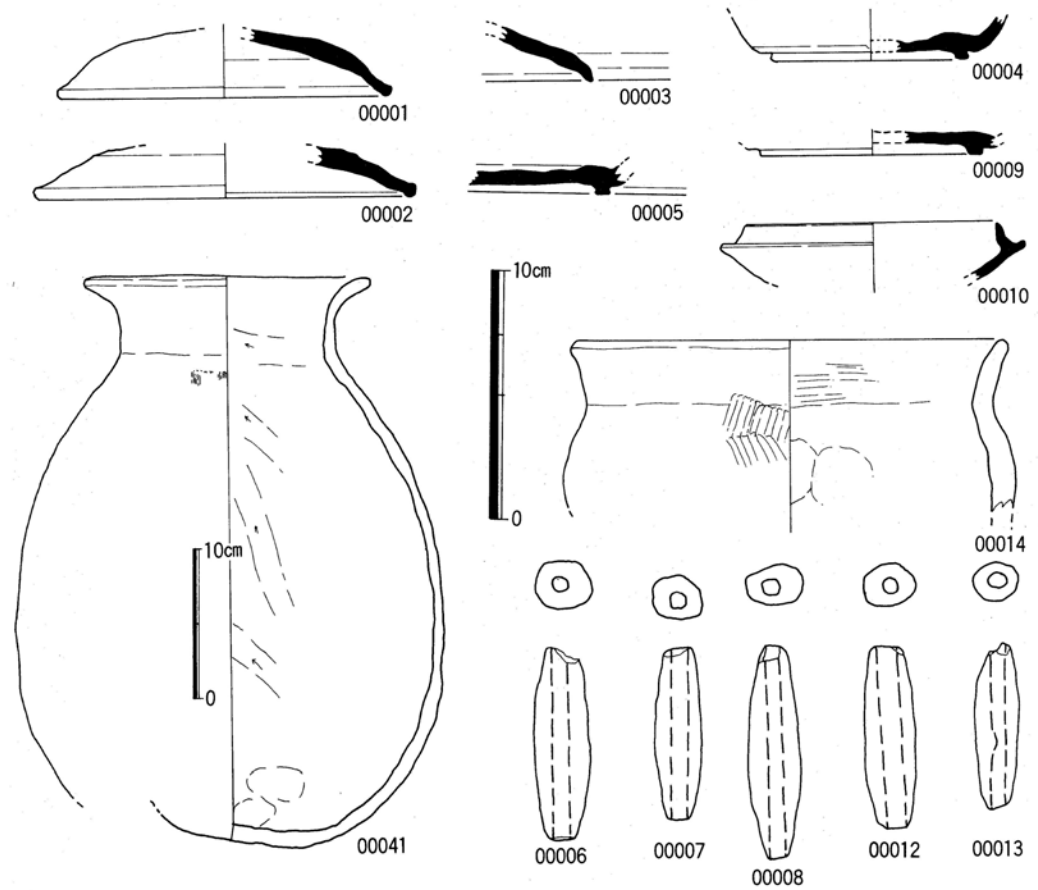


Fig.37 SB01実測図（1：80）



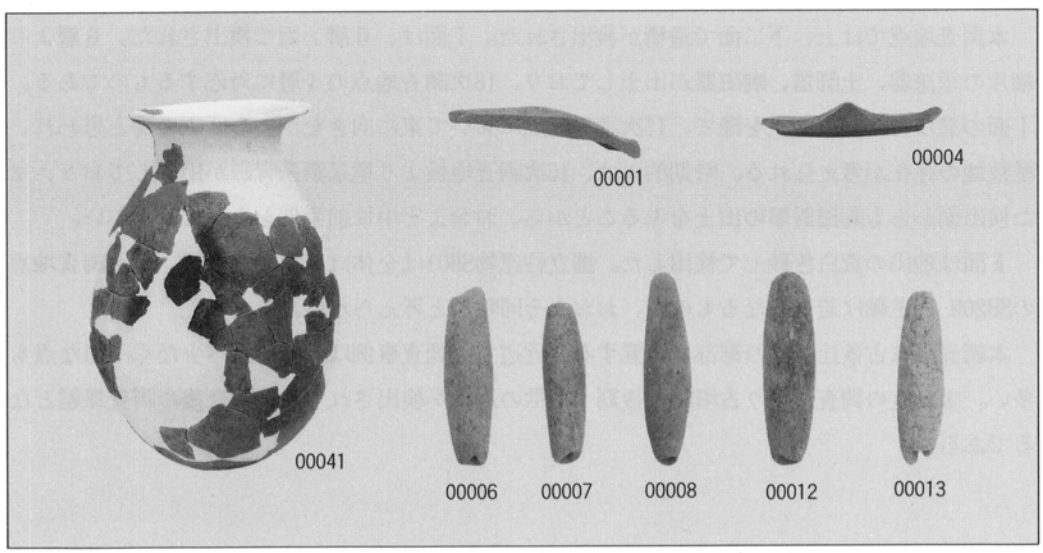


Fig.38 各遺構出土遺物（1：3 00041のみ1：5）

4　包含層出土の遺物 (Fig. 39)

00019、20～22、25、26、28、33～40は上部包含層出土の遺物である。25、26、28は須恵器である。25、26ともに高台部分を貼りつけたもので、外底面は回転ヘラケズリ調整である。28は台付長頸壷の体部と思われる。中央に浅い沈線をめぐらし、その間に櫛状工具による刺突文を施す。下半は、回転ヘラケズリ調整を行なう。19、21、22は土師器である。22は接合式の把手であるが、その他差込式のものも出土している。33、34は青磁碗破片である。33は、底部破片である。白身を帯びた淡茶褐色の胎土に畳付まで暗緑色の釉を施す。34は口縁部小片で、青白色の胎土に、青白色の釉を施す。外面に櫛描文が見られる。35～40は土錘である。紡錘形のものと円筒形のものに大別される。図示したもの以外にも30点ほどの資料があるが、いずれも概ね胎土は精良であり、焼成も良好である。重量は各々31ｇ、40ｇ、27ｇ、18ｇ、25ｇ、15ｇである。

00015～18は下部包含層出土の遺物である。00015、17は須恵器の坏身である。15には貼付高台がつく。17は高台がつかないタイプのものである。焼成は不良で暗黄灰色を呈す。16は甕の底部破片である。復元底径約13cmを測る大形のものである。胎土は石英砂粒を含み焼成はやや甘い。甕棺の底部破片と思われる。18は土錘である。小形の製品で長6.0cm、重量13ｇである。

4　小　　結

本調査地点では上、下二面で遺構が検出された。Ⅰ面は、６層上面で検出された。６層より細片の須恵器、土師器、陶磁器が出土しており、18次調査地点の４層に対応するものである。Ⅰ面の溝は18次調査地点を経て、15次調査地点において東に向きをかえる区画の溝と思われ、屋敷地の存在が考えられる。時期的には、15次調査地検より竜泉窯系青磁が出土しており、また検出面からも陶磁器等の出土をみることから、おおよそ中世前半期をあてておきたい。

Ⅱ面は地山の黄白色砂上で検出した。掘立柱建物SB01は全体は不明であるが、18次調査地点のSB202 と主軸は若干異なるものの、おおよそ同時期と考えられる。

本調査区は古砂丘南側の裾部に位置する。近辺での調査事例は北側に比べ少なく不明な点も多い。本年度の調査により古墳時代後期～中世の遺構が検出されており、今後の調査課題となるであろう。

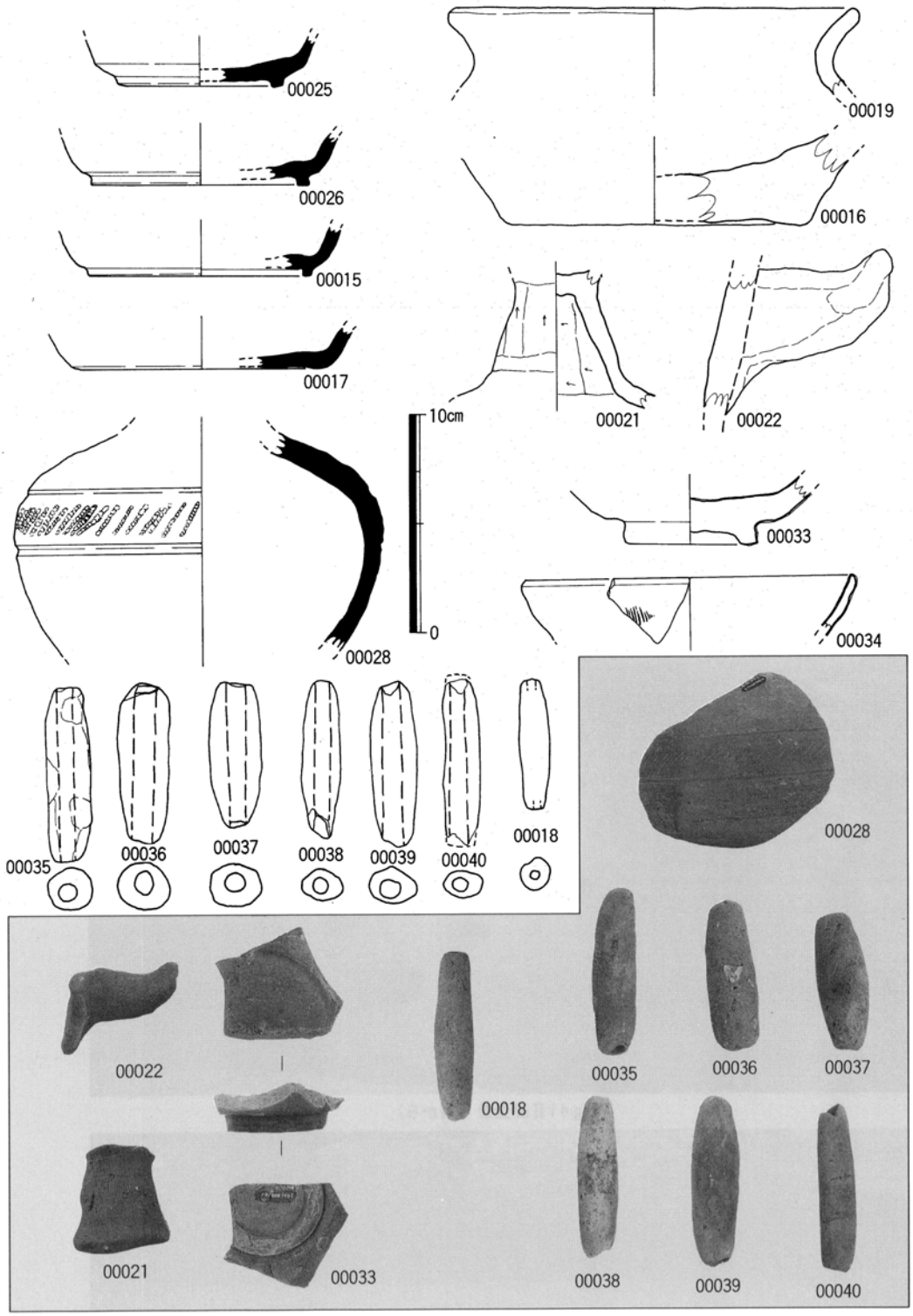


Fig.39 包含層出土遺物（1：3）

Fig.40 Ⅰ面全景（南から）

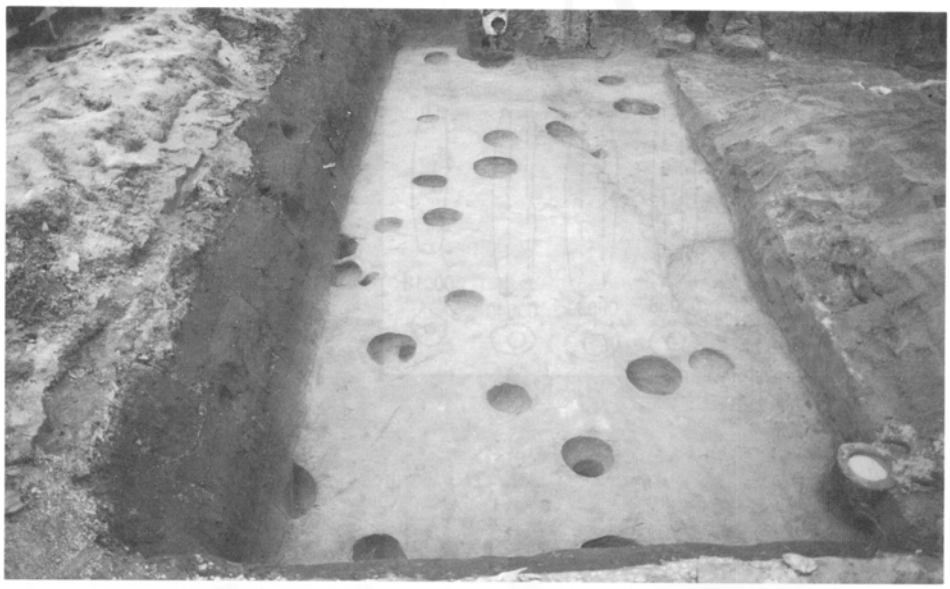


Fig.41 Ⅱ面全景（南から）

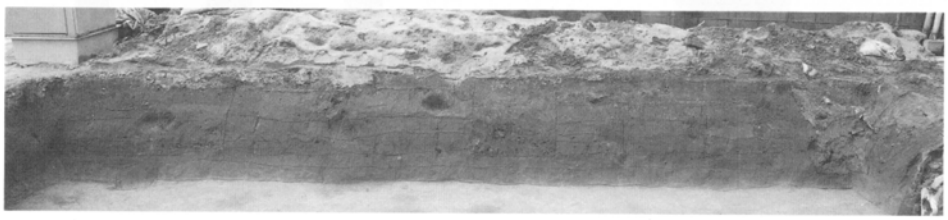
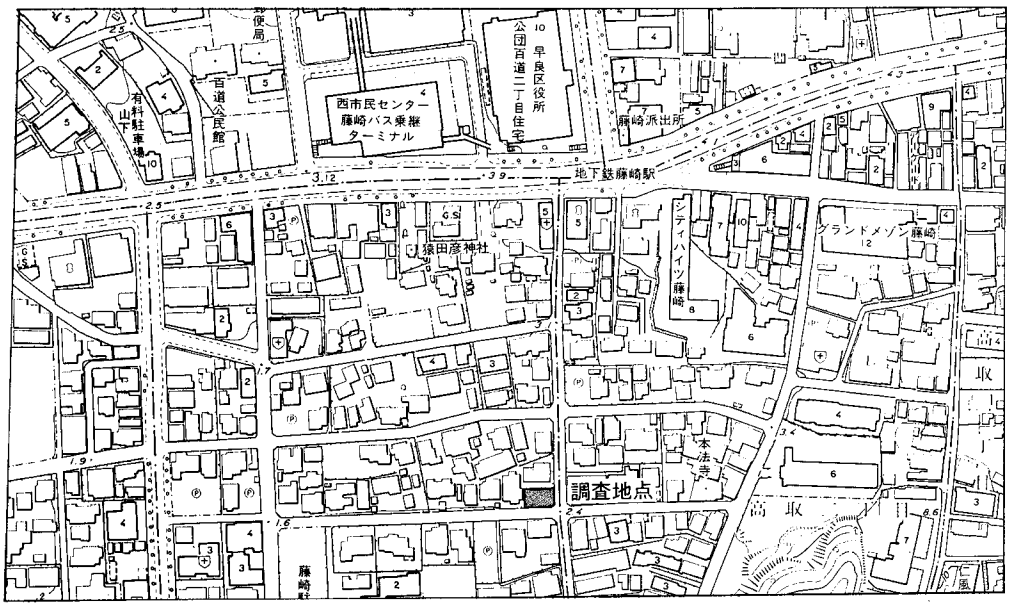


Fig.42 調査区西壁土層断面図

藤崎遺跡　第17次調査



1　調査に至る経過

藤崎遺跡では地下鉄１号線建設以来、路線周辺での中低層住宅の建設が相次いでいる。

第17次調査は、同地内に平成元（1989）年６月８日付でアパート建設の計画が出され、同年６月15日に試掘調査を行った。この結果中世期包含層および古墳時代後期土壙・ピット群などが検出された。包含層および遺構面は現地表面より－50～60cmにあたり、建築計画によれば杭打ち・根切り工事による影響が十分に考えられるため本格的調査が必要と判断された。試掘後、同年７月４日以降計８回に亘って建築内容・工程と本調査の時期をめぐる協議を重ねたが、同年12月５日の協議において同件の建築確認申請が11月29日付で認下された事が明らかとなり、以後建築工程が具体化された。調査は杭打ち後のすき取り工事（12月15日）終了後に開始した。

遺跡調査番号　8964	**遺跡略号**　FUA－17	**事前審査番号**　１－２－73
調査原因　アパート建設	**調査地地籍**　早良区藤崎１丁目119・120番	
開発面積　176.02㎡	**調査対象面積**　176.02㎡	**調査面積**　120㎡
調査期間　891215～891223	**調査担当**　横山邦継	

2　調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課

教育長　佐藤善郎　　文化部長　川崎賢治　　埋蔵文化財課長　柳田純孝

第１係長　飛高憲雄　　第２係長　柳沢一男

試掘調査担当者　常松幹雄・佐藤一郎

調査担当　横山邦継

現場作業　松井フユ子、金子由理子、三浦義隆、西尾たつよ、柴田常人、佐藤テル子

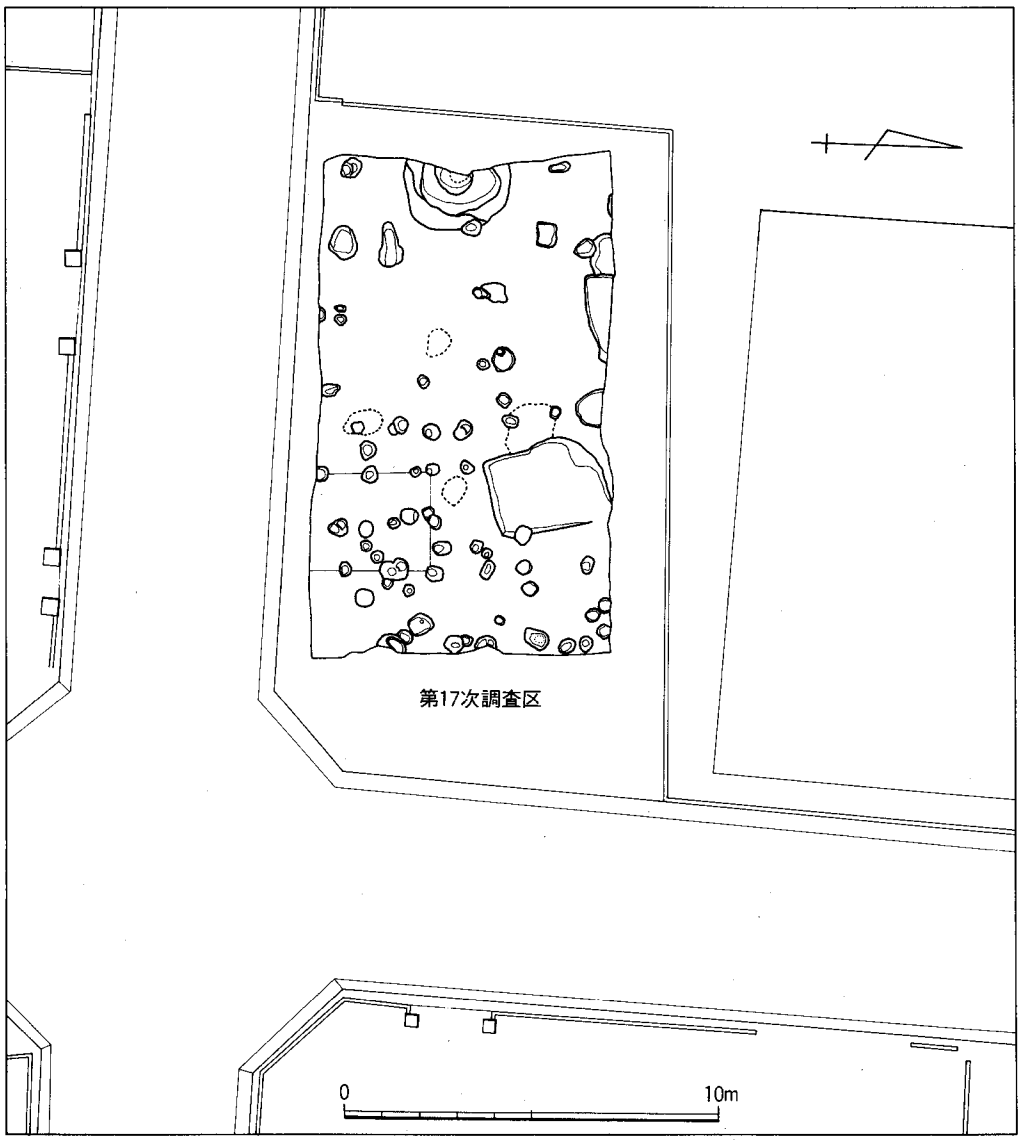


Fig.43 第17次調査地点図（1：200）

整理作業　　小森佐和子、土斐崎つや子

尚本調査にあたっては施主である笹林宏子氏、協議で窓口を積極的に進めて戴いた片山等氏(片山住宅)・山下俊郎氏(瑞樹設計)に非常な御苦労をかけたことに対してお礼を申しあげます。

3　調査の記録

調査は杭打ち工事終了後の表土掘削を機に開始した。対象地は試掘時に遺物包含層が確認されていたが、掘削時には保存状況が良好でなく、特に南・東側では殆ど残っていなかった。

併し乍ら調査区西側壁では層序は概ね以下の如くであった。第1層(表土・層厚約20cm)、第2層(黒色砂質土・層厚10cm)、第3層(暗黄褐色砂層－包含層・層厚20cm)、第4層(明褐～黄褐色砂層(基盤砂層)となる。調査はほぼ第四層上面まで掘削し、遺構の検出にあたったが、この際比較的まとまった量の土師器・須恵器などの出土がみられた。

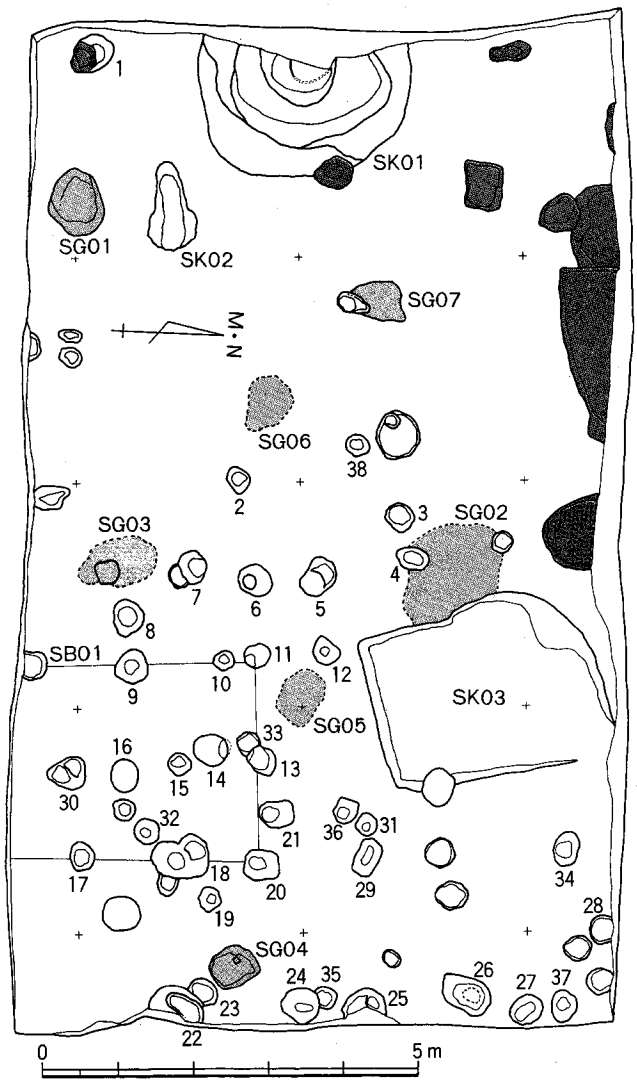


Fig.44 遺構配置図　(1：100)※アミは攪乱

遺構は北側壁付近にある多くの攪乱坑によって影響を受けてはいるがほぼ全面に密度高く検出された。主要な遺構は土壙3基(SK01～03)、炉址7基(SG01～07)、掘立柱建物1棟(SB01)であり、他にまとまらない柱穴群(36個)がある。

土壙ではSK01が井戸であり、埋土中より龍泉窯・同安窯系青磁碗などを出土している。また他のものは廃棄坑と考えられる。また炉址としたものは7基あるが、SG01・04のように土壙となり壁面がよく焼けしまっている例と土壙状とならずある範囲をもって平面的な焼けしまりをもつ

ものとがある。更に各遺構の埋土は大きく2種類に区別され、SK01・02では黒色粘質砂土であり、他はほぼ淡黒色砂土と区別できた。以下遺構ごとに個別説明を加えることとしたい。

1．土壙 (Fig. 45, 46)

① SK01 (Fig. 45, 46)

調査区西側壁面に接して検出した井戸である。全体のほぼ半分強が調査された。掘方は円形で南北径2.85m、東西径1.55m以上、深さ1.5mをはかる。井筒部分は掘方内のほぼ中央部にあり、掘方上端より1m下部から確認できる。また掘方内の埋土は大きく3層に区別することができる。上部より第1層(黄褐色砂土、層厚40cm)、第2層(淡灰褐色粘質砂土、層厚60cm)、第3層(井筒部埋土で暗灰色粘質土、層厚50cm)となり、第2・3層との境には厚さ1cm程の鉄分沈着層が認められる。また井戸埋土内より青磁器・土師器などが出土したが、それらは第2層最下部付近のものが多い。

出土遺物 (Fig. 46)

土師器皿 **00001**は完器である。器色淡褐色を呈し、口径15.3cm・器高2.1～2.3cmをはかる。体部は横ナデで、内底部にナデが残る。底部糸切り離し。**00002**も皿である。口縁は外方に開き、器色は淡褐色を呈する。口径14.8cm、器高2.3cmをはかる。**00003**も皿である。器色は淡褐色を呈し、底部径9cmをはかる。体部内外は横ナデで、内底部にナデを施す。**00004**は口縁部のみの破片である。器色は淡褐色を呈し、口径14.4cmをはかる。体部内外ともに横ナデである。**00005**は口縁立ちあがりの低い小形皿である。器色淡褐色を呈し、口径7.8cm・器高1.15cm・底径5.7cmをはかる。埋土第1層直上出土。

瓦質鉢 **00006**は擂鉢か。小破片である。器色は淡灰白色を呈する。胎土は非常に密で、焼成堅緻である。

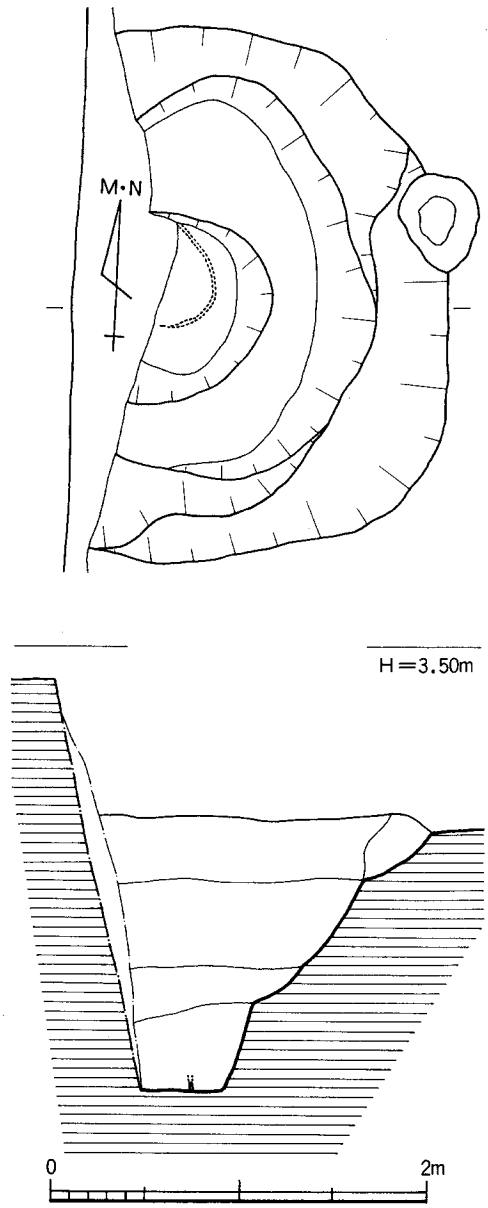


Fig.45 SK01実測図 (1：40)

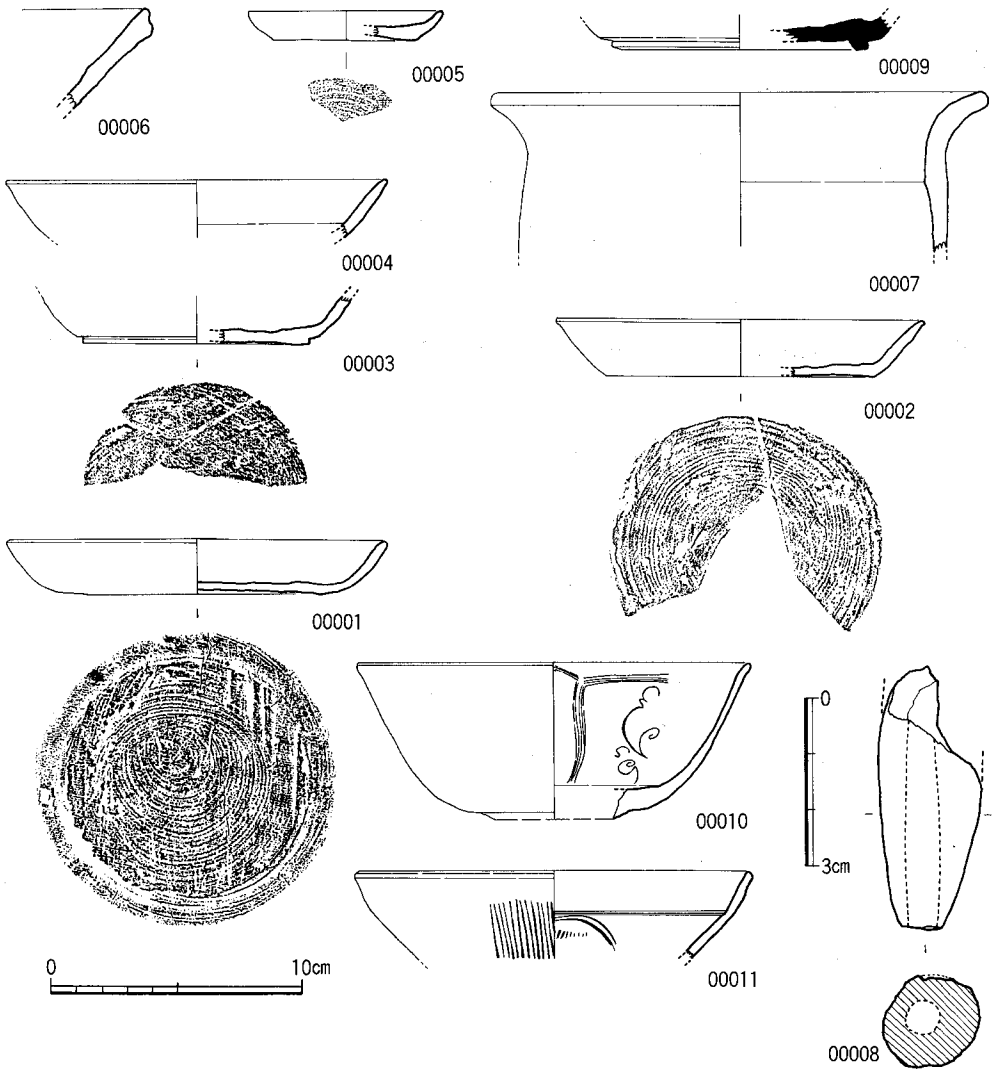


Fig.46 土壙出土遺物実測図（1：3）

青磁器　00010は体部内面に劃花文を施した青磁碗である。淡灰色の生地に暗い緑色釉を掛ける。口径15.8cm、器高6.3cmをはかる。高台畳付部分は焼成前に一部欠損している。龍泉窯産品である。

須恵器高台坏　00009は底部のみで口縁を欠く。高台は底部端よりやや内側の位置にある。器色灰色を呈し、高台部径10.3cmをはかる。

土師器甕　00007は器色淡褐～淡赤褐色を呈する。口縁部は内外面ともに横ナデで、体部外面縦方向のナデ、同内面横方向のヘラケズリを施す。口径20cm。

土錘　00008は端部がすぼまる小形錘である。器色淡褐色を呈し、現存長幅は4.7×1.9cmであ

る。なお出土遺物中の土師皿00001と青磁碗00010は共伴する。

② **SK02** (Fig. 47)

SK01の東側に隣接して検出された。現存長幅が1.2×0.44m、深さ0.25mを測る長方形土壙である。東側壁を撹乱によって失う。埋土は焼土を混じる黒色砂質土であり、他に暗赤褐色砂ブロックがみられる。壁内面は火を受けた痕跡はなく、遺物も土師器破片が小量出土したにとどまった。

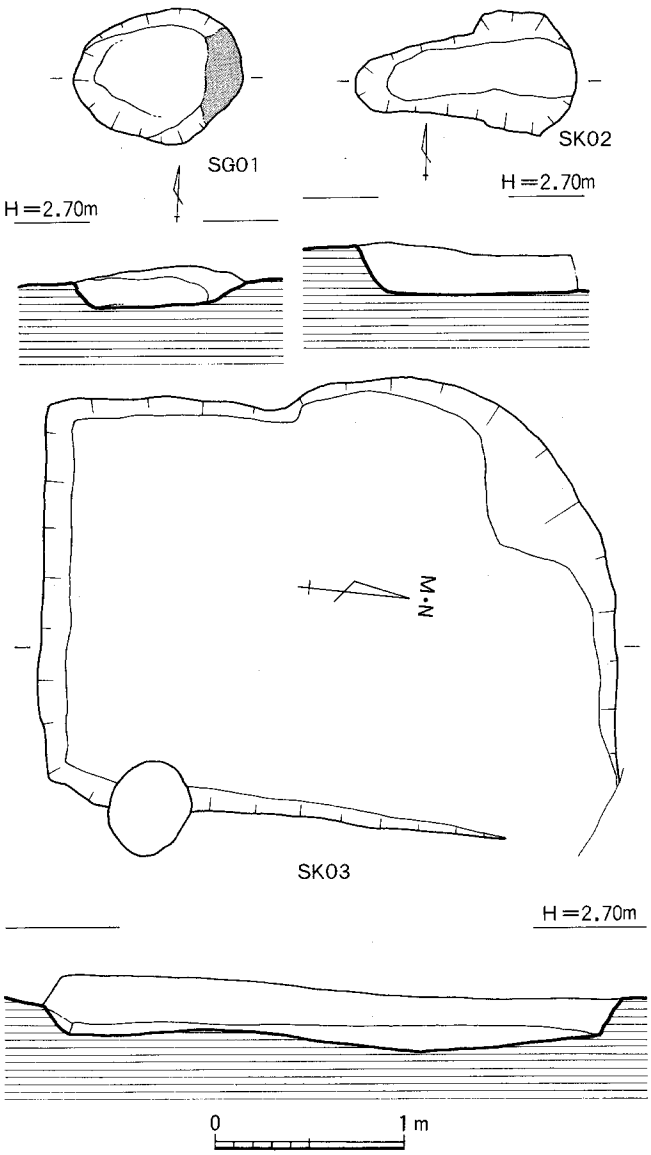


Fig.47 SK02、SK03、SG01実測図（1：40）

③ **SK03** (Fig. 47)

調査区東側で検出した土壙で、長幅が3×2m、深さ0.3mの長方形を呈する。埋土は暗黄褐色砂質土を主とし、床面直上に暗褐色砂土（5cm程の薄層）がある。埋土中には近世陶磁器とともに輸入青磁器が小量出土した。

出土遺物 (Fig. 46)

青磁器碗00011は口縁下2cm程で緩く屈折する碗で、体部内面に一条沈線を施す。体部内外には櫛描き文を施し、釉は淡い緑色釉をうすく掛ける。口径15.8cm。同安窯産品である。

2. 炉址 (Fig. 44・47)

炉址としたものは7基（SG01～07）あり、竪穴状を呈するSG01・04、地山砂層が楕円形に焼けたSG02・03・05・06・07とがある。

SG01・04 何れも壁上端付近が火に遭う。夫々は長・幅・深さが0.9×0.7×0.2m(01)、0.6×0.1m(0.4)をはかる。01では須恵器高坏？（00018)が出土し

た。器色淡灰色を呈し、突帯部径9.8cmをはかる。

S G02・03・05・07　順に長幅規模を記すと1.3×1.2m・1.1×0.6m・0.7×0.5m・0.8×0.6m・0.6×0.5mとなり、楕円形のものが多い。02より土師器脚台？（00019）が出土した。端部は踏ばり、底径9.4cmをはかる。

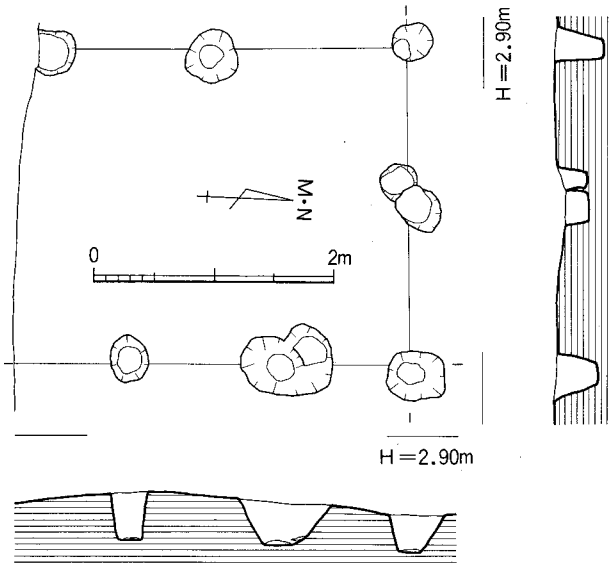


Fig.48 SB01実測図（1：60）

3　掘立柱建物（Fig. 48）

SB01は調査区東側に検出された2×2間以上の南北棟建物である。梁行2間全長2.7m（柱間1.35m）、桁行2間以上（全長3.2m以上）で柱間は一定しない。柱穴18より7世紀始めの須恵器が出土した。

4　柱穴群（Fig. 49）

何れも径0.3～0.4m、深さ0.2～0.3m程をはかる。埋土は殆ど浅い黒色砂土であるがSP21・22のように7世紀始めの須恵器坏身・蓋（00019・00014）や土錘（00017・SP30）を出土するものとSP29出土の玉縁口縁白磁碗を含む少なくとも2時期の建物群となる可能性が高い。

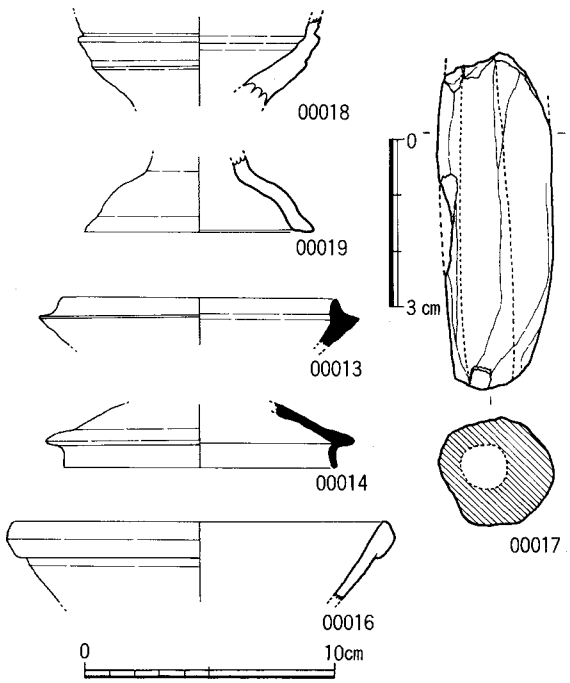


Fig49. 炉址及び柱穴出土遺物実測図（1：3他）

5　表採遺物（Fig. 50）

何れも遺構検出時に採集した。中には肩部に平行タタキを施した甕（00026・00027）や口縁「く」字に屈曲する甕（00025・00023）、須恵器的手法をもつ甕（00022）、須恵器坏蓋（00035・00036）、同坏身（0003

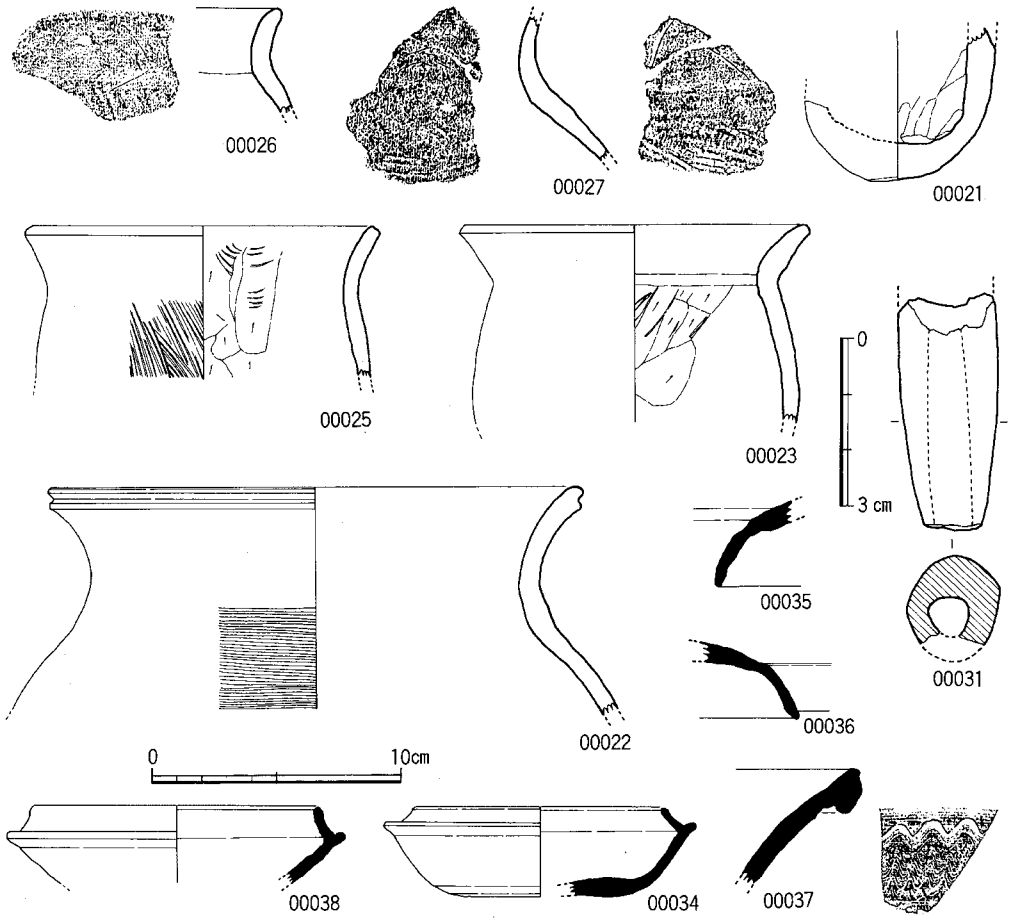


Fig.50 遺構検出面採集遺物実測図（1：3他）

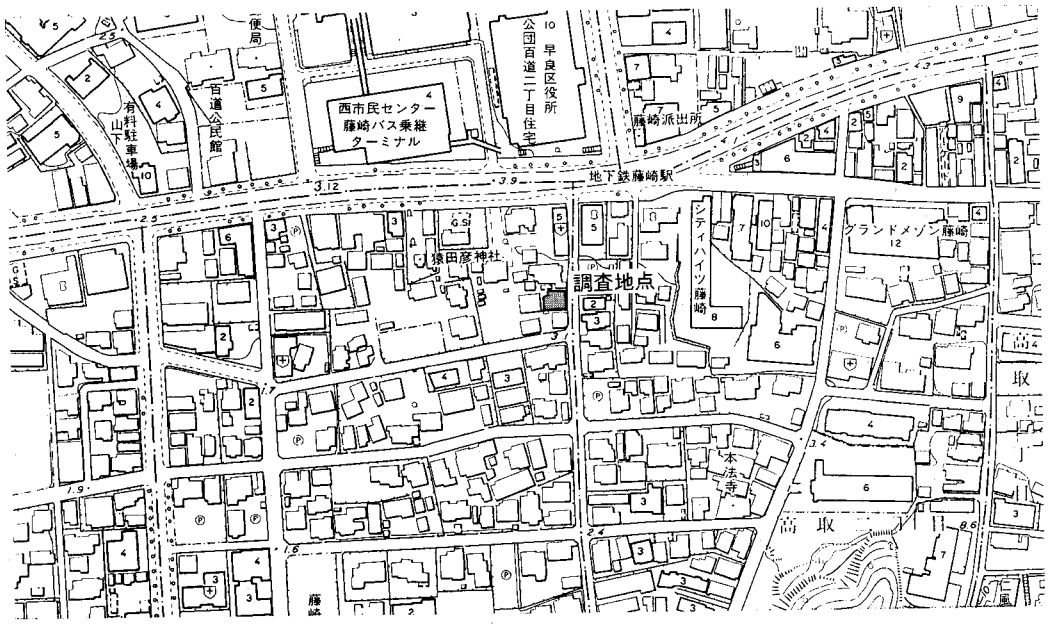
8・00034）、同甕（00037）および土錘（00031）、飯蛸壷（00021）などがあり、6世紀後半～7世紀始めにかけての遺物が多い。

4 小 結

以上簡略に調査成果を述べて来た。今回第17次調査では土壙3、炉址7、掘立柱建物1棟、柱穴36などが検出されたが、これからは大別して第Ⅰ期―6世紀後半～7世紀初め（SG01～07、SB01、柱穴群）と第Ⅱ期―中世期（13世紀―SK01・02、柱穴群）とに区別できると考えられる。

第Ⅰ期は炉址・掘立柱建物が主遺構であり、これに伴うと考えられる遺物には土錘・蛸壷および製塩用のものも含む可能性のある土師器甕などがあって漁労を主とする色あいの濃い集落と思われる。また第Ⅱ期は井戸を伴い、同時期に集落を形成したことが知られる。いずれにしても両時期に藤崎砂丘の後背地で集落址の一端が把握できたのは大きな成果であった。

第 18 次 調 査



調査番号 8977
遺跡略号 FUA-18

1　調査に至る経過

平成元年、早良区藤崎１丁目59地内に、マンション建設に先立って、埋蔵文化財課に、文化財の有無についての確認申請がだされた。埋蔵文化財課では、試掘調査の結果、遺構、遺物が検出されたこと、南北の両隣接地が、既調査地で遺構の検出があったことから、本調査が必要と判断した。これに伴い、埋蔵文化財課と地権者である崎山健二氏との間で協議が調い、調査に関する契約書が取り交わされた。これに従って平成２年３月１日から、３月７日まで調査を行った。

遺跡調査番号	8977		遺跡略号	ＦＵＡ－18	
調査地地番	福岡市早良区藤崎１－59		分布地図番号	81（室見）	
開発面積	126.24㎡	調査対象面積	126.24㎡	調査面積	66.2㎡
調査期間	1990年（平成２年）３月１日～７日		事前審査番号	１－２－305	

2　調査体制

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課第２係

調査総括　埋蔵文化財課課長　柳田純孝　　埋蔵文化財課第２係長　柳沢一男

調査庶務　安倍徹

調査担当　宮井善朗

発掘作業　今村真也　井上靖崇　平田信吉　杉村文子　中牟田サカエ　西島タミエ　西島初子　小林フミ子　吉岡蓮枝　能美八重子　箱田邦子

整理作業　太田頼子　太田次子　飯田千恵子　西原由規子　林由紀子　浜野年代　外村陽子

なお、調査に関しては、地権者の崎山氏、施工業者のナガノホームには、条件整備等で、協力をえた。また、埋蔵文化財課長家伸氏には、実測等の協力をえた。

調査期間中大きな事故もなく調査を終了できたのは、前記諸氏をはじめ多くのかたがたのご協力の賜物であることを明記して、感謝の意を表したい。

3　調査の記録

(1)　概要及び層序

調査は、試掘調査の成果により良好な遺物包含層及び複数の遺構面が予想されたので、包含層である4層暗褐色砂層上面まで重機によるすき取りを行った。この面で検出された遺構をⅠ面遺構とし、101から通し番号を付した。同様に5層上面をⅡ面とし、201から番号を付した(Fig.51,52)。

1層　残土、バラス。2層　表土。3層　暗褐色中～細砂。遺物包含層。4層　暗赤褐色中～細砂。遺物包含層。Ⅰ面の遺構は、4層上面で検出された。5層　淡黄褐色中砂。Ⅱ面の遺構は、5層上面で検出された。6層　赤褐色中砂。北側に向かって上がっていく。SC102 は、この層の上面で検出された。7層　淡灰色中～細砂。地山。

なお、遺構各説の項でも述べるが、Ⅰ面南半部の遺構面である4層は、北側にいくにつれて薄くなり、北端部では、下位の6層赤褐色土になっている。この6層は、堆積状況からみて、5層と同様、Ⅱ面の遺構面になると思われる。しかし、以下の記述では、調査時の記録の都合上、調査時に検出した遺構面ごとに各遺構の説明を行ない、出土遺物の検討を行ったのち各遺構の時期及び遺跡の形成について、まとめを行なうという形をとることにしたい。

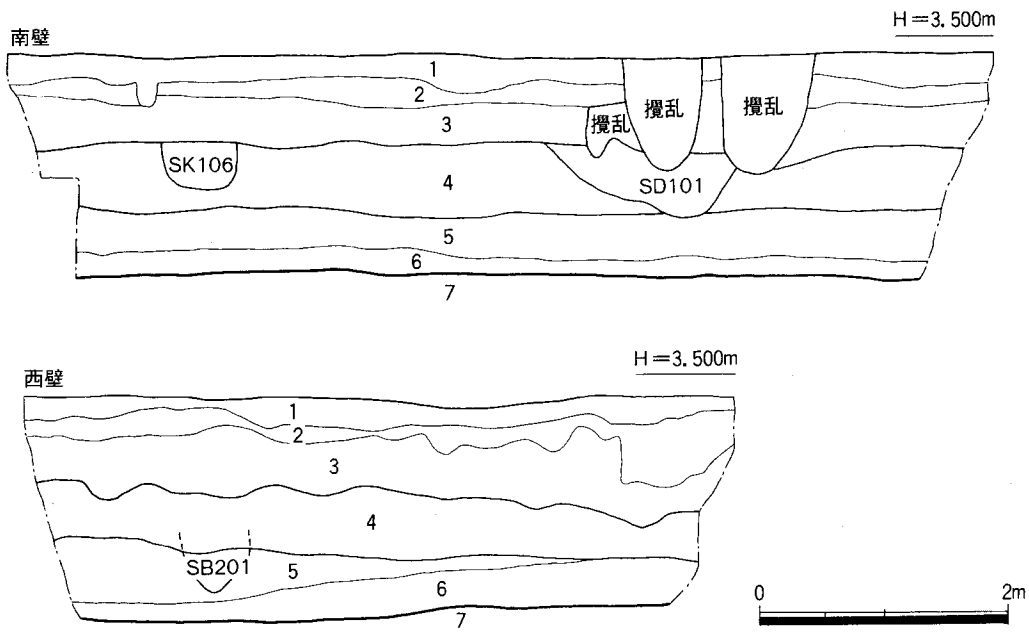
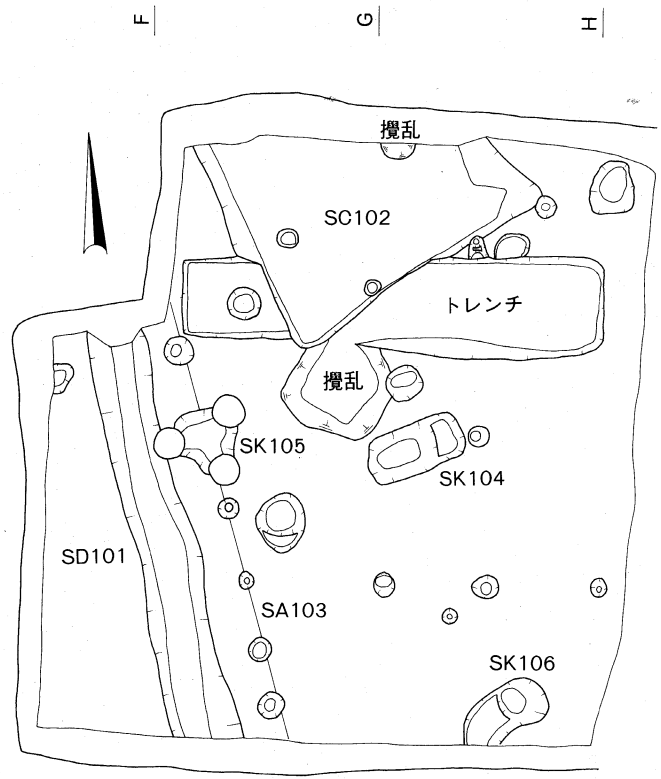
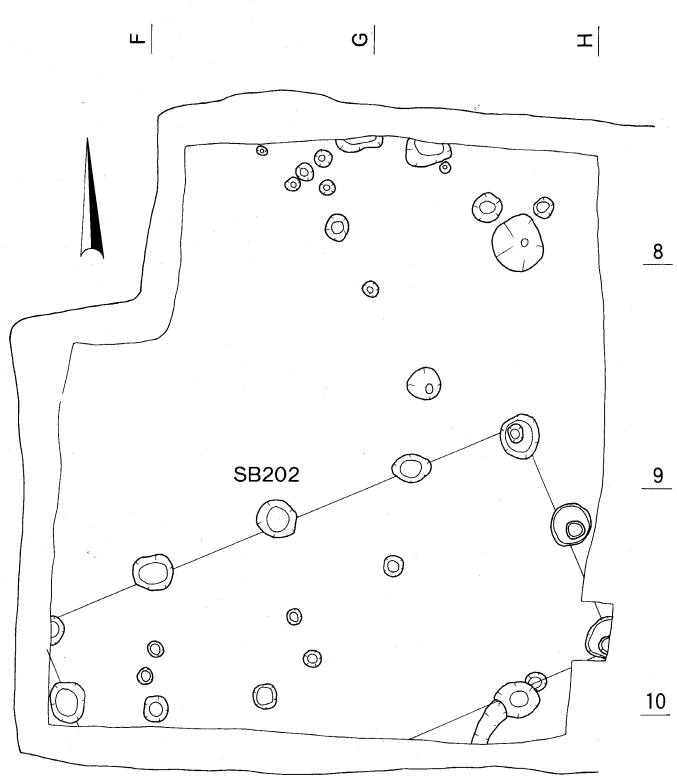


Fig.51　第18次調査区土層断面図（1：60）



Ⅰ面遺構配置図



Ⅱ面遺構配置図

0 2m

Fig.52 第18次調査区遺構配置図（1：100）

(2) 検出遺構

Ⅰ面の遺構

ＳＤ101（Fig. 53, 54）

調査区西端で検出した。検出面での幅80cm、溝底幅25cmを測る。また調査区内での延長は5.6ｍである。南壁断面の観察によれば、本来は1.6m以上の幅であったと考えられる。溝の方向は、Ｎ－11°－Ｗである。溝の断面は、逆台形を示す。この溝は、南接する16次調査地区で検出されている溝SD01に接続するものと考えられ、SD01を含め、延長は約16mに及ぶ。北接する15次調査区では、同方向の溝は検出されていないが、ほぼ直交する溝SD25が検出されており、この溝に接続する可能性は高いと思われる。

ＳＡ103（Fig. 53, 54）

SD101に沿って等間隔で並ぶピット５個を検出した。SD101に伴う柵列と考えられる。遺物は一切出土していない。遺構検出面では、SD101の東側の縁に設けられているように見えるが、南壁断面に示されたSD101の溝幅から判断すると、SA103は、SD101の東側斜面に設けられていた可能性が高いと考えられる。

ＳＫ104（Fig. 55）

調査区中央で検出された土壙である。短辺60cm×長辺１ｍの隅丸長方形を呈する。覆土中より、図示に耐えない須恵器、土師器の小片が出土した。

ＳＫ105（Fig53, 54）

SD101北端の東側で検出した。コンクリート杭に攪乱されており、本来の形状は不明である。あるいは、二つ以上の遺構が、切り合うものかもしれない。覆土中から、陶磁器、須恵器、土師器の小片が出土した。

ＳＫ106（Fig. 55）

調査区南東端で検出した。北側で段状になるのは、Ⅱ面の遺構であるSB202のピットを掘りすぎたためである。南端は、調査区外へ延びており、溝状になるかもしれない。覆土中より、土錘１点と、須恵器、土師器の小片が出土した。

ＳＣ102（Fig. 55, 56）

調査区北端で検出した。検出面は、６層赤褐色土層上面である。北側が調査区外にでるが、一辺約４ｍの方形になるものと考えられる。壁は、南西隅を試掘トレンチで欠くが、概ね30cmほど残存している。南壁から50cmほど離れたところで、赤褐色粘土が、まとまって検出され、カマドの可能性も考えて精査したが、カマドの存在を裏付けるような遺構、遺物は、検出されなかった。また、床面には、灰白色の粘土が、散漫に散布しており、張り床があった可能性もある。

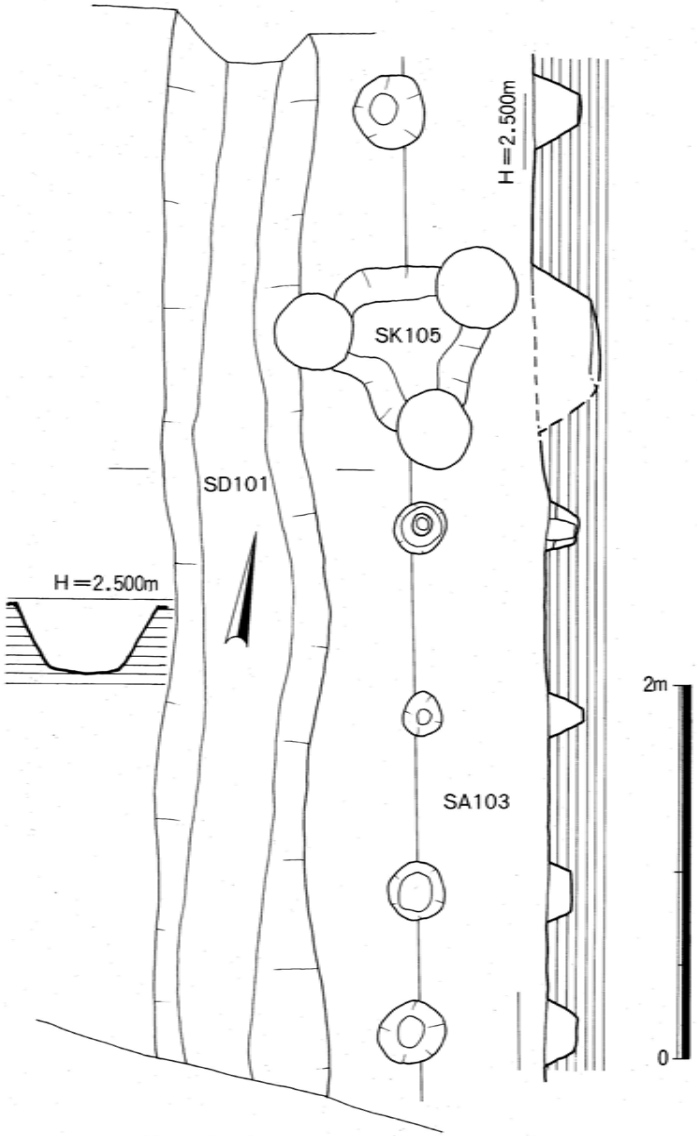


Fig.53 SD101、SA103、SK105実測図（1：40）

Fig.54 SD101、SA103、SK105（北から）

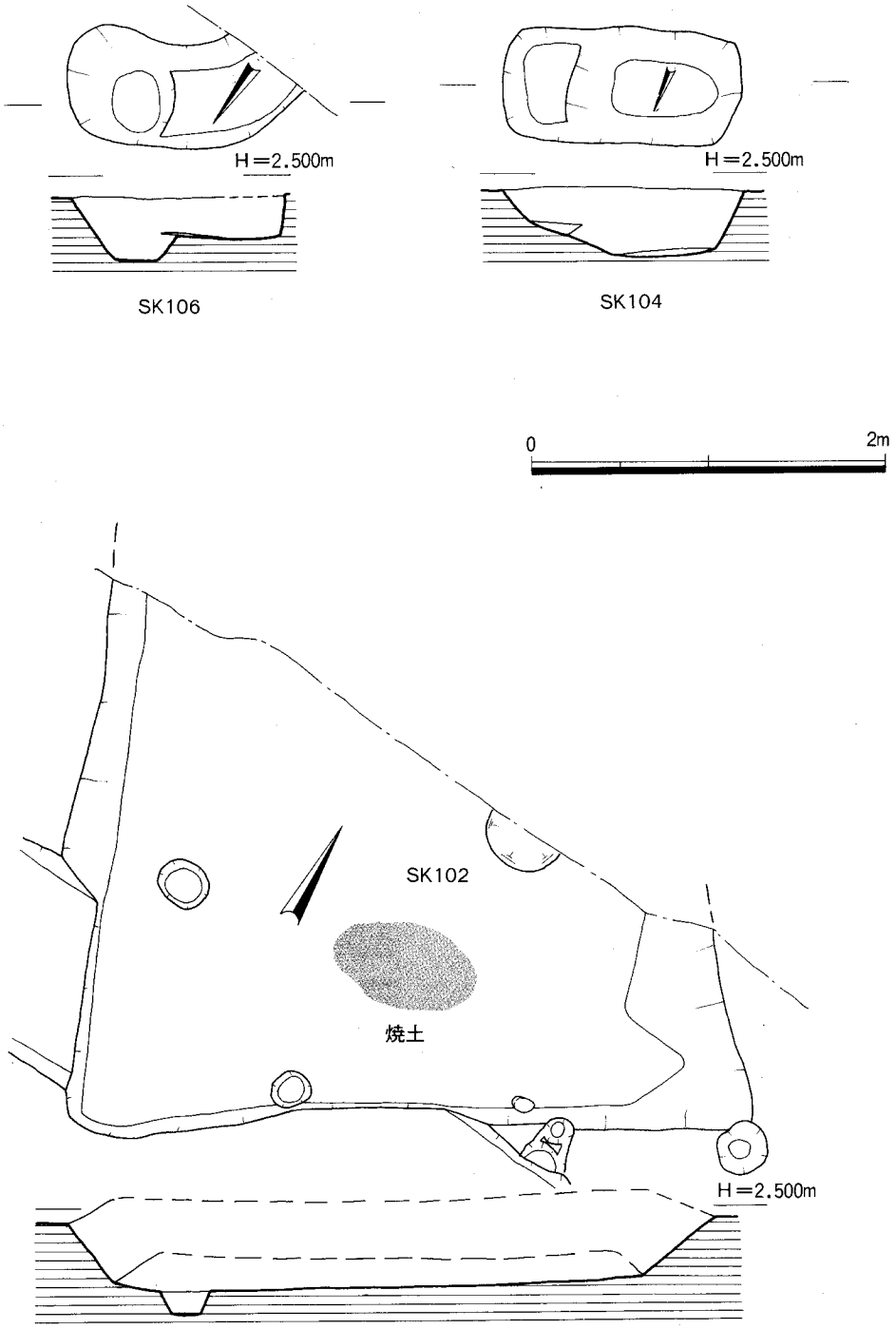


Fig.55 SK106、SK104、SC102実測図（1：40）

Fig.56 SC102（北から）

Fig.57 Ⅰ面全景（東から）

Ⅱ面の遺構

ＳＢ202（Fig.59,60）

Ⅱ面５層上面で検出した掘立柱建物である。南側が、調査区外であるため、確実な規模は、不明であるが、４間×２間以上の建物である。方向は、Ｎ－68°－Ｅである。ほぼ、SC101と同方向である。

(3)　出土遺物

出土遺物は少なく、総量でコンテナ１箱である。遺構出土の遺物は、さらに少ない。

00001、00002は須恵器の蓋である。小片のため、径は明らかでない。６世紀後半代以降に属するものであろう。00003は、土師器の把手である。表面の凹凸がおおい。00001～00003は、SD101の出土である。

00004は直立する単口縁をもつ土師器である。外面には、ハケメを施し、内面は、ケズリのあとナデ調整を行う。焼成は、極めて良い。甑であろうか。00005は、土師器甕の口縁部であろう。内外面ヨコナデ調整される。胎土中に角閃石が目立つ。00007は、土師器甕の底部である。かなり平坦である。00006は、須恵器坩蓋であろう。体部と口縁部の境に、二条の沈線を巡らせる。天井部はヘラ切りで、内底部には、静止ナデを施す。口径は10cm程になろう。00004～00007は、SC202からの出土である。

00008は、SK106出土の、土師器甕口縁である。口縁端がまるみを帯びる。胴部内面にヘラケズリを施す。00009は、SB202の北東隅のピット（SB202－１）から出土した、土師器甕口縁である。これにより、辛うじて、SB202の時期を推定することができる。外面にハケメを施している。00014は、SK105出土の陶磁器である。角皿で、波状口縁をなす。見込みに、「壽」銘をもつ。中世以降の物であろう。

包含層（とくに４層）出土の遺物で、図化に耐えるものを、次に示す。00010は、須恵器坏蓋である。口縁端を下方に折り曲げ、天井部には擬宝珠形つまみをもつ。

Fig.58 Ⅱ面北半部（東から）

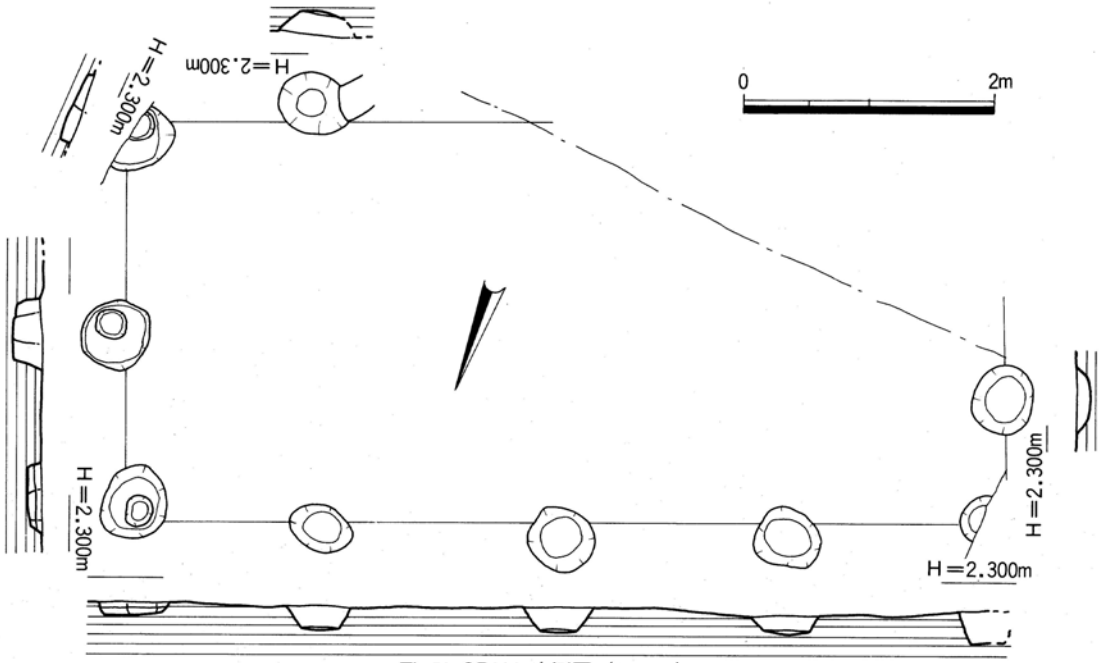


Fig.59 SB202 実測図（1：40）

Fig.60 SB202 （南から）

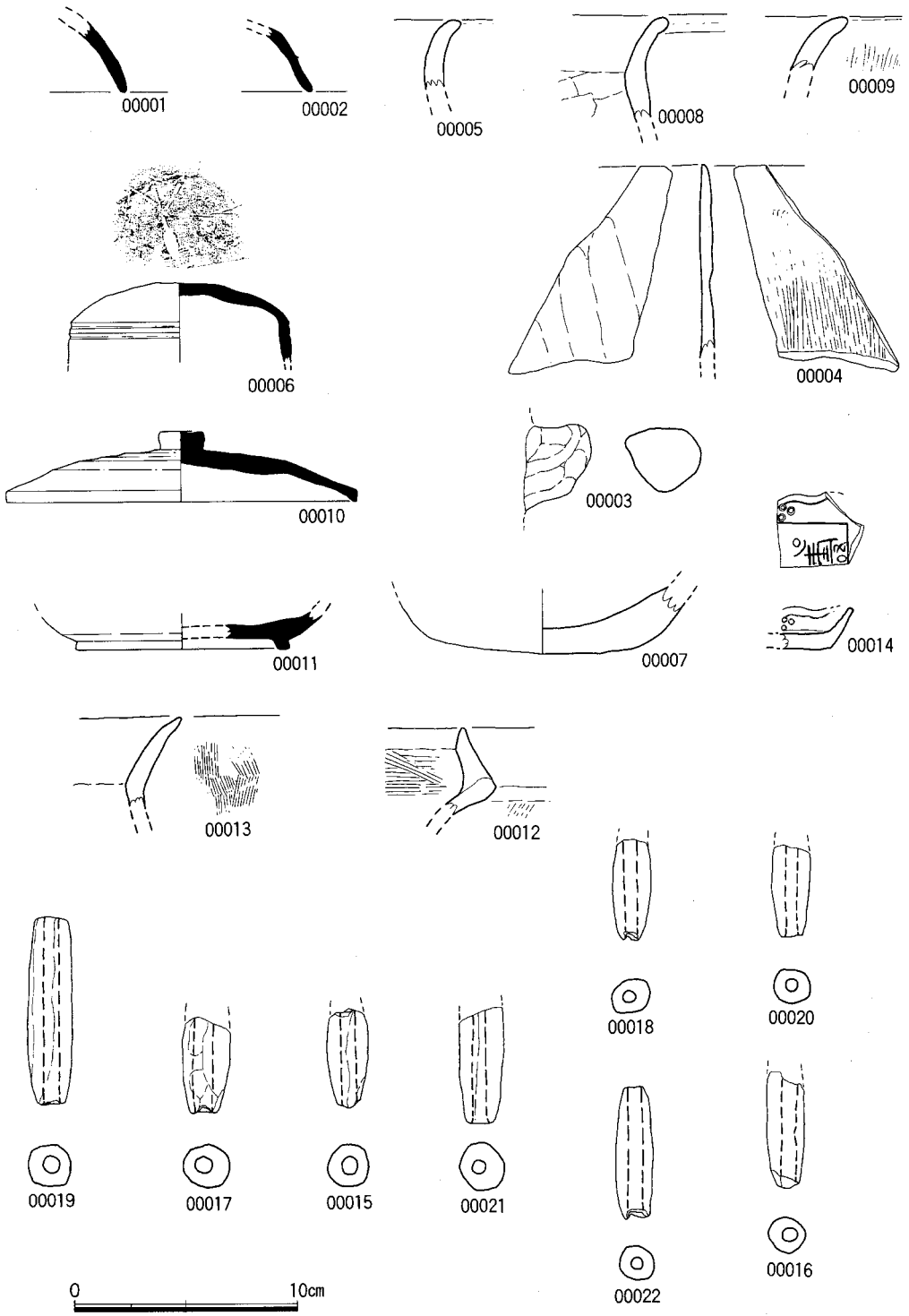


Fig.61 出土遺物実測図（1：3）

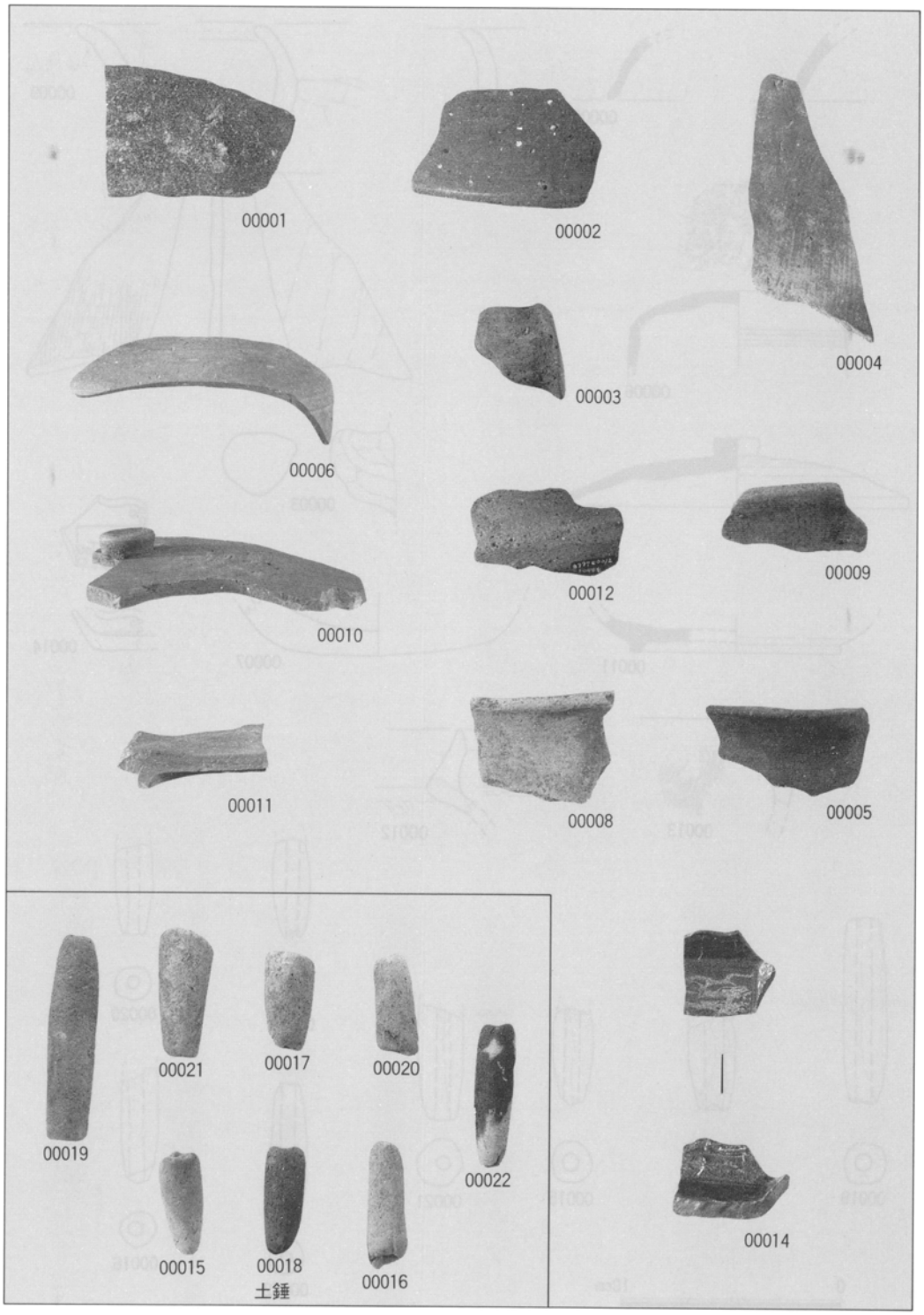

00001
00002
00004
00003
00006
00012
00009
00010
00011
00008
00005
00021
00017
00020
00019
00022
00015
00018
土錘
00016
00014

Fig.62 出土遺物

00011は、須恵器の高台付きの坏である。高台は、や踏張り気味である。内底部には、静止ナデを施す。00013は、土師器甕の口縁部である。外面ハケメ。00014は、弥生土器の複合口縁壷である。接合部が二段になるところ、口縁端内側に段をもつところなど、やや新しい傾向がうかがわれる。弥生時代終末期に属するものであろう。

この他、目立つ遺物として、土錘がある。大小二類程度に分かれるようである。大型品として00019、00017、00015、00021があり、完形品の00019は、重さ28ｇである。小型品には、00016、00020、00018、00022があり、完形品と思われる00022の重さは11ｇである。

4　小　　結

藤崎遺跡第18次調査地点は、検出面により、上下二面に分かれるが、層位及び出土遺物によれば、次の二期に分かれるものと考えられる。第一期は、古墳時代後期～古代（6～8世紀頃）と考えられる時期で、SC102、SB202が含まれる。前述したように、SC102は、6層上面で検出されている。4層は、南北土層図（Fig. 51）の北端よりさらに北側、調査区北端近くで薄くなり、15次調査区では検出されていない。5、6層は、色調が若干異なるほかは大きな違いはなく、変化も漸移的である。したがって6層上面のSC102は、4層より下位に位置する可能性が高い。また出土遺物からも、6世紀末～7世紀に位置すると考えられる。SB202は、遺物がほとんど無いが、土師器00009からみれば、該期に近い時期に属するものであろう。また建物主軸方向が、SC102に近いことも、この二つの建物遺構が、近い時期にあったことを推測させる。

第二期は、古代～中世に相当する。SC102をのぞくⅠ面のほとんどの遺構、すなわち4層上面の遺構がこれにあたろう。4層の形成時期は、主体をしめる遺物が、8世紀代のものと考えられること、Ⅰ面検出時の遺物（3層ないしは4層上面）に、図化には耐えないが、竜泉窯系の青磁や天目等が見られることから、12世紀代頃に、下限を求められよう。したがって、4層上面から掘り込まれたSD101をはじめとする遺構は、古代以降のものと考えられる。出土遺物から見れば、SK105から、中世陶磁器が出土しているほかは、ほとんどが古代の遺物であるが、SD101 に続くと見られる第15次調査地点検出のSD25からは、竜泉窯系青磁が出土しているとのことである。これらの溝（15次調査SD25、18次調査SD101、16次調査SD01、02）は、南北16m以上、東西10m以上の範囲を方形に区画しており、内側には、逆茂木様の柵列を設けている。内部には、屋敷などの施設が、当然想定されるが、詳しい内容は、今後の調査時の課題となるであろう。

4層とした包含層は、18次調査区のほか、16次、17次調査区でも検出されている。また、1983年調査の9次調査区でも包含層が検出されている。9次調査区は、16、18次調査区の西側約

70mにあたり、13世紀代の遺物が多量に出土したとされる。時期的には、ややずれも感じられるものの、ほぼ連続する整地層ととらえてよかろう。整地層の形成時期が厳密には一時期でないことは、すでに9次調査の報告でも指摘されていることである。いずれにしても12～13世紀代にかなりの規模で砂丘南辺部に整地が行われ、溝で区画された屋敷地などがそこに築かれることは、栄山周辺の13世紀後半代の溝の性格とともに、この地域の中世史を考えるうえで留意しておくべきことであろう。

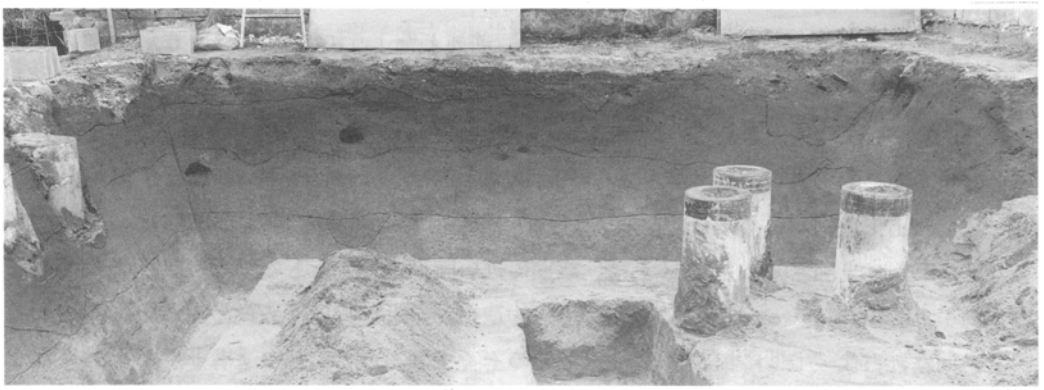


Fig.63 調査区西壁土層

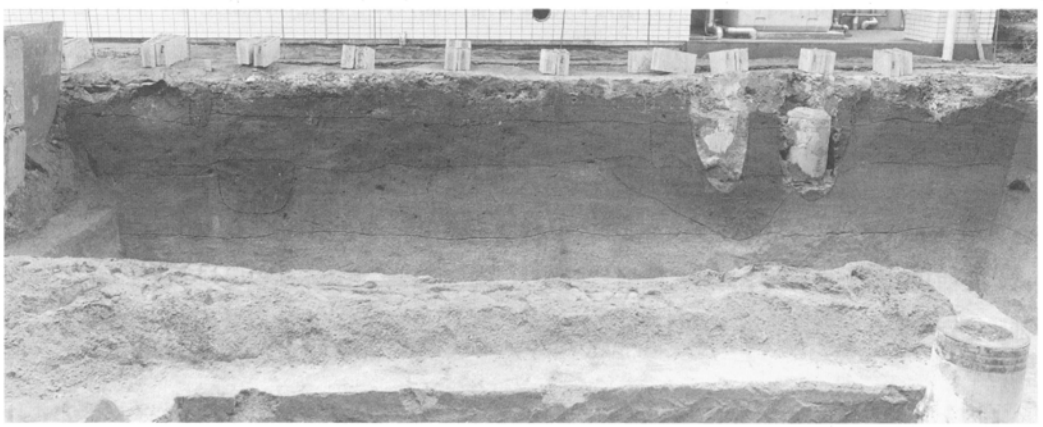


Fig64 調査区南壁土層

藤崎遺跡６

第15、16、17、18次調査

福岡市埋蔵文化財報告書第259集

１９９１年３月15日

発　　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神一丁目８－１
印　　刷　福 博 綜 合 印 刷